# 翠先生のワン吉くん～こんにちは赤ちゃん1.5？～

いときりばさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
翠先生のワン吉くん～こんにちは赤ちゃん１．５？～

【Ｎコード】
Ｎ６２７７Ｒ

【作者名】
いときりばさみ

【あらすじ】
「こんにちは赤ちゃん」の翠先生サイドストーリーです。

※「こんにちは赤ちゃん」同様、こちらもフォレストノベルという携帯小説サイトに投稿しているものを、加筆修正しております。

## 聞こえてしまった（前書き）

こんにちは赤ちゃんと一つにまとめられたらと思ったのですが、いときりばさみの乏しい文章能力では、無理でした。

そんな残念な理由から始まりました本作ですが、温かく見守っていただけると幸いです。

**聞こえてしまった**

その日の私はむしゃくしゃしていた。

「芋焼酎！原液で！」

固まる店員。

振り返る客たち。

「あの、飲み方は、ロック、水割り、ソーダ割りのどれに……。」

「原液。」

再び固まる店員。

苦笑いしながらこちらの様子をうかがう客たち。

「翠先生、いくらお酒強いからって、無茶言わないでください！あの、水割りでお願いします。」

集まっていく視線に耐えられなくなったのか、私の向かいに座っていた舞ちゃんが言った。

舞ちゃんに優しく言われて、へらへらと笑いながら去ろうとした店員の腕を、私は掴んだ。

「原液じゃないなら、ロック。最低でもロック。じゃなきゃ飲まないから。」

店員のおびえたような瞳を見つめながら、言いたいことだけすっぱり言うと、私は店員の腕を放した。

店員は、震える手でオーダーを書き直すと、走り去っていった。

「はぁ、まったく……。」

今、ため息をついたのは、私じゃなくて向かい側に座る舞ちゃんだ。
「先生、せっかく美人なのに、睨むから、さっきの店員さん怯えてたじゃないですか？まあまあイケメンだったのに……。」
そして、舞ちゃんは、もう一つため息をついた。
「いいの！私は出会いを求めてここに来たわけじゃないんだから！酔っぱらわなきゃやってられないんだから！」

何ていうから、自業自得だけど、今日の出来事を思い出してしまった。

それは、今日の最後の診察の時だった。

「ですから、こちらから必要なときにはお呼びしますから……。」
「原則的に、妊婦一人で入室しろとおっしゃるのですか？貴女、そんなことがまかり通るとお思いで？」
この姑が簡単に折れるわけはないと思いつつも、私も折れるわけにはいかなかった。それは……。
「前回のようなことになったらどう責任を取られるおつもりなのですか？」
そう、ばあさんの嫁の中山静香さんは前回、つまり第一子の妊娠の際に……って、ちょっと待て！それは、あんたのせいだろうが！
喉元まで出かかった言葉をぐっとこらえた。
静香さんは、前回の第一子の妊娠の際、お子さんを早産で産んだ。
早産と言っても、ちょっとやそっとのレベルではない。
彼女の長男、荘太君は、超低体重出生時として、体重わずか４３０gで生まれてきてしまったのだ。
そして今なお、荘太君はＮＩＣＵに入院している。
それは、紛れもなく、今、妊婦よりもでしゃばって私の目の前にいる姑、中山志乃から受けたストレスが原因だ、と、私は思ってい

る。
私だって、同じことは繰り返したくない。
だからこそ、こうして頭を下げているというのに。
「貴女と話していても、埒があきません。」
珍しく、この姑と意見が合った。

しかしそれが、さらなる波乱の幕開けだった。
相手が悪すぎた。
中山志乃、５６歳。大手財閥の名誉会長。
金も権力も持ち合わせ、病院でも顔の利くこの姑は、診察室を飛び出すと、直ちに産婦人科の医局長と病院長に立て続けに抗議していった。
医局長からは、次から主治医を変更すると宣言され、病院長からは次に問題を起こしたらクビだと宣告された。

何でもかんでもあの姑の言いなりになってたら、元の木阿弥じゃない！
また、姑のストレスで患者がボロボロになってしまったらって、赤ちゃんにも影響が出てしまったらって、誰も考えないの？
自分が原因だと理解しないあの姑にも、金と権力に弱すぎる医局長や院長にも、そして、無力すぎる自分にも、すべてに苛立って、私はむしゃくしゃしていた。

「あーもう、やっぱり腹が立つ！」
恐ろしさのあまりか、ものすごい速さでやってきた芋焼酎を、ものすごい速さで飲み干した私は、ドン、と音を立ててグラスを置い

た。
「先生、ペース速過ぎです。」
舞ちゃんは呆れ顔だ。
「先生、いつまでも怒ってたら、せっかくの美人が台無しですよ！ね、楽しい話しましょ！恋バナとか！」
舞ちゃんの話題転換の方向性は、大抵、恋バナだ。
「先生、今年入ってきた纐纐先生とか、お似合いだと思いますよ、どうですか？」
しかも、大抵誰かしらとりあえずイケメンを私に勧めてくる。こちらはいい迷惑だというのに。
「年下は守備範囲外だからなぁ。」
今まさに、舞ちゃんの話題の中心の纐纐先生が、友人らしき男性と一緒に舞ちゃんの真後ろのカウンター席に腰かけた。
「纐纐先生は、年上とか年下とかそういう判定基準を用いるのがもったいないくらいのイケメンじゃないですか！先生、何ワガママ言ってるんですか？」
どうやら舞ちゃんは、気付いていないらしかった。
「うーん、でもなぁ。」
私は言葉を濁してごまかすことにした。
一応、舞ちゃんには言ってないけど恋人もいるしなぁ。
言うとうるさそうだしなぁ。
……あ、芋焼酎のおかわり、きた！

「先生……。」
舞ちゃんの声のトーンが低い。
これは、ヤバいかもしれない。
恐る恐る顔を上げた。
「そんな、贅沢ばっか言ってるから……。」
あ、舞ちゃん、怒ってる。
しかも、説教が始まった。

……こうなると、長いんだよな。

「だからね、先生、アダムとイブの時代から男と女は本能で愛し合うように……。」

舞ちゃん、大変申し訳ないけれど、その話、耳にタコだわ。

私の視線は、私に恋愛とは何ぞやの講義をしている舞ちゃんを通り越して、纐纈先生たちに向いていた。

二人の元にビールが届いた。

纐纈先生の隣に座っている男の子が、ビールに手を伸ばしたその時、纐纈先生がそれを制した。

……え？

待て、なの？

居酒屋に来ておきながら、待て、なの？

隣に座る男の子がとても恨めしそうに纐纈先生を見ていた。

でも、恨めしそうに見つめながらも、ちゃんと、男の子は「待て」を続けていた。

エライエライ。

なんか、ワンちゃんみたい。

「酒が入る前に聞きたい。」

纐纈先生が話し始めた。

あら、待て、じゃなかったのね。

「笹岡は、いったいどうやってあの子の異変に気づいたんだ？」

その言葉を聞いて、あることを思い出した。

それは、今、私の目の前で、恋愛とは何か、の講義を一生懸命にしている舞ちゃんから聞いた話だ。

それは、今日の昼のこと。
放射線部の受付の電話が鳴った。
電話の相手は纐纈先生。
ある、ＮＩＣＵの赤ちゃんの、腹部のＣＴを撮ってほしいと言ってきた。
電話応対をした、放射線技師は、前々日にその子のＸ線を撮っていて、電子カルテを見ていたから知っていた。
その子の主疾患は、心疾患。
しかも、纐纈先生の専門は、小児循環器。
心臓のＣＴを撮ることはあり得ても、腹部のＣＴなんておかしいだろう？
纐纈先生に何度も確認したが、先生は、腹部のＣＴを撮ってほしい、との一点張りだった。

仕方なく、腹部のＣＴを撮った。
ところが、放射線技師の予想に反して、赤ちゃんの腹部に、異常が見つかった。
赤ちゃんは、すぐに、緊急手術を行い、事なきを得た。
もう少し発見が遅れていたら、命取りになっていたらしい。

専門外であるはずの消化器系の異変に気付いた纐纈先生は、赤ちゃんを救った英雄だと皆が称えていた。

でも、待って！
ちょっと、待って！

今の、纐纈先生の話しぶりでは、その、赤ちゃんの異変に気付いたのは、纐纈先生ではなく、その隣に座る、ササオカくんってこと？
それって、どういうこと？
彼は、何者なの？

ササオカ君の目が、ビールと纐纈先生を行ったり来たりした。
あ、ビール、飲みたいんだ。
そして、このままでは、「待て」の状態がずっと続くと感じたらしいワンちゃん、もとい、ササオカ君は、さらりと言った。

「様子とか？」
何か、今の発言、嘘っぽい感じするな……。
「様子なら、俺だって、最初に笹岡に呼ばれたときに、しっかり見た。どんな様子を見てあの子がお腹が痛いと思ったんだ？」
あーあ、何だかワンちゃん追い詰められちゃってるよ。
下手な嘘つくからいけないんだよ。

ワンちゃんの視線は、相変わらずビールと纐纈先生とを行ったり来たりしている。
纐纈先生は、ワンちゃんの目をじっと見つめ続けている。
何だか、大型犬と対峙しているチワワのようだわ、このワンちゃん、もとい、ササオカくん。
正直に言っちゃえばいいのに。
って、私は真実なんて知らないけどね。

そして、しばらくの間考え込むようにしていたチワワ君、じゃなくてササオカ君は、ちらっと纐纈先生を見た。
まだ睨まれてるよ、チワワ君。

そして、一旦、視線を纐纈先生から逸らしていたチワワ君は、一つ、深呼吸をすると、纐纈先生に向き直って話しはじめた。
「信じられないことだと思うんだが、」

今度は、真実を話す。

そんな気がした。

「俺は、赤ちゃんの『声』が、聞こえるんだ。」
「声だったら、普通、聞こえるだろ。」
泣き声の、聞き分けができるってことかしら？
「纐纈も、聞こえるのか？」
聞こえるのか？って、そりゃあ、泣き声は、聞こえるでしょ？
「はぁ？何のことだ？」
まあ、纐纈先生が怪訝そうにするのも仕方ないと思う。

その反応を見たチワワ君は、何かに気付いたかのように、一瞬目を丸くした。
どうしたというのだろう？
そして、チワワ君は、再び纐纈先生の目を見た。

「赤ちゃんの、泣き声じゃなくって、その、何ていうか、赤ちゃんの『想い』が『声』として聞こえるんだ。」
こら、チワ公！何だ、そのおとぎ話みたいな話は！

でも、すごく信じられない話なのに。
嘘みたいな話なのに。
おとぎ話のようにしか思えないはずなのに。

私には、チワ公のさっきまでのどんな話よりも、ずっと真実を話しているように見えた。

じゃあ、もし、本当だったとしたら？
そうだとしたら、チワ公、もとい、ササオカ君には、赤ちゃんたちが伝えたい『想い』が伝わっているということになる。
……伝えたい、『想い』。

もし、それが本当だったら。
本当に、その『想い』が伝わっているとしたら……。
そうだとしたら……。
私はいつも、考えるより前に行動してしまう。
思いついた瞬間には立ち上がっていて、いつの間にか相当お酒をあおっていたらしい私は、立ち上がった時に少しだけふらついた。
「先生、お手洗いですか？」
舞ちゃんの声は聞こえなかったことにして、私は、チワ公、もとい、ササオカ君の元へと歩いた。
「ねえねえ、今の話、本当？」
そして、ササオカ君の肩にのしかかって話しかけた。
あれ？何かすっごくきょっとーん、と、されてるぞ？
ま、いっか。
「赤ちゃんの、『声』が聞こえるとか……。」
「ちょっと、翠先生！」
あれ？舞ちゃん？
私は抵抗もむなしく、店の外へと連れ出されてしまった。
「ちょっと、舞ちゃ……。」
「先生！」
あ、舞ちゃん怒ってる。
「何で纐纈先生があんなに近くにいたこと、教えてくれなかったんですか？」
そっち？怒るとこ？

「私ったら、そうとは知らずにあることないこと……。」

……言っちゃったんだ。

ドンマイ、舞ちゃん！

## 接触

中山志乃と言い争ったあの日から一週間が経った。
電子カルテで診察予定の患者を見ていた私は、あるところでふと、目が留まった。

中山静香、という名前が、私の診察予定の患者の中にあった。
確か、主治医は替えられた筈じゃ……。
事務の子に聞いてみたけれども、入力ミスではないらしく、困惑した顔で頷くだけだった。
そうこうしているうちに、中山静香さんの順番になってしまったので、とりあえず、彼女を診察室へと招き入れることにした。

「失礼します。」
小さく挨拶しながら、妊婦が一人で入ってきた。
「あの、お姑さんは、大丈夫なんですか？」
思わず聞くと、妊婦は小さく頷いた。
「先生がいいって、一生懸命やってくれる翠先生がいいって、義母にお願いしたので……。」
嬉しかった。
私を選んでくれたということだけじゃない。
ちゃんと、自分の意見を姑に伝えられるほどに、彼女の心が強くなったことが、何よりも嬉しかった。

それくらい、強い心になった彼女なら、と思い、私はふと、静香さんに聞いた。
「あれから、荘ちゃんの、荘太君のところには……？」
ちょうど3日前に、1歳の誕生日を迎えたはずの荘太君に、会いに行ったのかもしれないと、仄かに期待を寄せていた。

ところが静香さんの顔に曇りが見えた。
彼女は曇った表情のまま、首を横に振った。

静香さんは、荘ちゃんが入院してすぐのころに一度お見舞いに行ったきり、一度も荘ちゃんに会いに行っていない。
荘ちゃんが、超低体重出生児として生まれてしまったのは、自分のせいだと、罪悪感に押し潰されそうになってしまうから。
機械に繋がれた小さな小さな壊れそうなわが子を見ていられないから。

荘ちゃんは、そんなお母さんのことを何と思っているんだろう？

そう考えたとき、ふと、誰かの言葉が頭をよぎった。

「赤ちゃんの、泣き声じゃなくって、その、何ていうか、赤ちゃんの『想い』が『声』として聞こえるんだ。」
泣き声を、聞き分けているわけじゃない。
その『想い』が直接、『声』として、聞こえてきているんだ。
そう言ったのは、誰だっただろう？

もしも、再びその人に出会うことがあるのならば、聞きたい。

荘太君は今、お母さんを、愛していますか？

その日の診察は静香さんが最後だった。
私は、一人、考えていた。
私は確かに、この耳で聞いた。
誰かが言っていたんだ。

赤ちゃんの『想い』が『声』として、聞こえるんだ、って。
そう言ったのは、誰だっただろう。
物思いに耽りながら、私は帰路についた。
もとい、うっかり帰ってしまった。

自分の選択に、後悔したのは、夜更けに待機医用のＰＨＳが音を立てた時だった。
しまった！今週、待機当番だった！
しかも、自宅で、ＰＨＳが鳴るまで気付かないなんて……。

とりあえず、電話に出なきゃ。
「もしもし。」
「あ、翠先生、母体搬送の患者さんが救急車でこちらに向かってます。あと２０分ほどで到着するそうです。」
「私、今、自宅にいるからあと３０分はかかるかも……。とりあえず、急いで向かうね。」
ため息をつきながら終話ボタンを押した。

駅近、家具付きという条件に飛びついて借りた今のマンション。
最寄駅の乗り継ぎが最悪で、病院へ行くにはかなり遠回りだと気付いたのは、勤め始めてから。

どうしようか？
タクシーで行こうかな？

せっかく夜間割増料金にもめげずにタクシー拾ったのに。
どこの車か知らないけど、事故るなよ！
渋滞反対！
そんなこんなで、私は５０分もかけて病院に到着し、病棟に到着した時にはすでに患者はオペ室に行っていた。

「翠先生！来て早々ごめん！すぐにＮＩＣＵに電話して！」
執刀医が私の姿を見るなり叫ぶように言った。
状況は、かなりやばそうだ。

すぐに、オペ室用のＰＨＳを手に取り、ＮＩＣＵに電話をかけた。
電話に出たのはＮＩＣＵの主任さんだった。
要件を手短に伝えると、「わかりました、すぐ伺います。」という頼もしい返事をもらった。

そしてその次の瞬間だった。
まだ、受話器を置いていなかったのか、遠巻きに、主任さんの声が聞こえた。

「笹岡、緊急……ガチャ……ツー、ツー……。」
あ、そうだ！あれは、ササオカ君だ！
赤ちゃんの『想い』が、『声』として聞こえると言っていた彼は、こんなに身近なところにいた。

「先生！こっち、ヘルプ！」
「あ、はい！」

でも、今は、それどころじゃない。

「翠先生、いつまで寝てるんですか？」
オペ室の休憩室で、私は、舞ちゃんに、揺り起こされた。
「あとちょっと……。」
「ダメです！もう、病棟回診の時間ですよ！」
そっか、私、今日、病棟当番だったんだ。

「ほら、先生、早く！」
舞ちゃんにせかされながら病棟へと歩いていく途中で、昨日オペを執刀していた先生に会った。
「あ、翠先生、おはようございます。」
その表情は、どことなく、浮かない。
もしかして……？
「あ、あの、昨晩オペした患者さんは？」
「うん。順調に回復してるよ。」
よかった。生きてるんだ。
「今朝、様子を見てきたけど、お子さんが亡くなったショックがさすがにまだ残ってるけど、体調のほうはよさそうだったよ。」
……え？
「お子さん……が？」
「それが、ＮＩＣＵで心肺蘇生をしてたんだけど、ダメだったみたい。」
そうか、それで、先生は浮かない顔をしてたんだ。
でも、何か、心に引っ掛かるものがある。
ＮＩＣＵ……？
「あっ！」
「翠先生？ていうか、どこ行く気ですか？病棟はこっちです！」

思いつくままにＮＩＣＵに向かいそうになった私は、舞ちゃんに一喝されて、病棟へと引っ張られていった。

「ちょっと出かけるね！」

午前の回診が終わった。

患者さんは皆、順調。

と、なれば、思い立ったが吉日ということで、私は、自称「赤ちゃんの『想い』が『声』として聞こえる」看護師の、笹岡君のところへと向かった。

だって、居場所は割れているもの。

産科病棟に隣接する、ＮＩＣＵ。

しかも、彼は、恐らく夜勤明けだから、そろそろ解放される時間かもしれない。

職員通用口から、堂々と、ＮＩＣＵへと入って行った私の耳に、主任さんの声が聞こえた。

「笹岡、初夜勤お疲れ、帰っていいぞ。」

私ってば、タイミング良すぎ！

そのまま、声のしたほうへと歩いて行った。

あ、荘ちゃんが、泣いてる。

って、今は笹岡君を探して……あ、いた！

ぼーっとこちらを見ていた笹岡君と目が合った。

ちょうど、引継ぎが終わった後らしく、一緒にいた看護師は「お疲れ様」と、笹岡君に声をかけて去って行った。

怪しまれないように笑顔で近づく。

よし、ワンちゃん捕獲成功！

さて、お手並み拝見と行きますか？

新生児室に連れてこられて、若干困惑気味のワン……笹岡君。
一人で百面相しているのは、困惑しているからなのか、それとも、あの子たちの『声』が聞こえているからなのか。
それを、今から確かめなきゃ。
「ねぇ、」
そっと近づいて話しかけると、笹岡君は慌てふためいて赤面していた。
えっとね、君と、危ない関係になる気はかけらもないから！
少し落ち着いたらしい笹岡君に、そのままの距離感で私は話しかけた。
「この間の話って本当？」
「この間の話……。」
そう言ったきり、笹岡君は、固まっている。
大丈夫かな？この子？
今宇宙と交信してますとか不思議発言が飛び出したら、どうしよう？
「この間って、あの、翠先生がべろんべ……。」
こらこらこらこら！
不思議発言の前に爆弾発言が来ちゃったよ！
いたいけな赤ちゃんの前でなんてことを！
私のイメージが！
私のイメージが！
……おっといけない！
私としたことが、取り乱してしまったわ！
「で、どうなの？」
そう、笹岡君に振り回されてちゃいけない。
私には、ちゃんと、聞きたいことがあったんだ。

私は、真剣にワン吉君、もとい、笹岡君の目を見つめた。
笹岡君も、それに呼応するかのように真剣なまなざしでこちらを見つめ返してきた。

さあ、何て答える？ワン吉君？
実は、嘘だったの？
それとも、その嘘を、つき通すの？

それとも、本当なの？

「谷岡先生が、思っている通りだと思います。」
それは、私が予想していた答えのパターンにはなかった。
白か黒か、はっきり答えられるものだと思っていた。

でも、その答えは、灰色だった。
嘘だ、と否定したくはない。
でも、本当だと言える勇気はない。
その答えに、ワン吉の想いがこもっているような気がした。
信じてもらえるわけはない、でも、本当は、信じてほしい、と。

私が信じなければ、『声』の存在など、なかったことになる。
私が信じれば、その存在は、あることになる。
要するに、答えは私次第。
それならば、私は、可能性に賭けてみたい。

「じゃあ、私の希望的観測の通りってことね。」
でもね、ワン吉君、手放しで信じるわけじゃあないのよ。

「じゃあ、笹岡君、そこの子、何言ってるか、教えて？」

「『声』ですか？」
「もちろん。」

もしも、『声』というものが聞こえるのならば、私は知りたい。
彼らの『想い』を。
それを知る手段に気付いていながら、見過ごすことは、私にはできない。

ベビーの『声』を『通訳』してもらい、胎児の『声』も『通訳』してもらった。

私の見解では、ワン吉君の話は、嘘ではなさそうだ。

少し鼓動が早くなる。
だって、私の中では、ここからが、本番なのだから。

もしも、本当に『声』が聞こえるのであれば……。
もしも、本当に、その『想い』を知ることができるのであれば……。

とりあえず、ワン吉君、もとい、笹岡君を連れて、中庭へ出た。

「笹岡君、奢ってあげるからコーヒー買ってきて！」
ワン吉君にもご褒美をあげなきゃね。
大事な話をしている途中で眠くなってもらっても困るし。

不思議そうに見つめるワン吉君に再び笑顔を向けると、自販機に向かって走って行った。
エライエライ。
フリスビーとか投げたらすごい笑顔でとって戻ってきそうだよ、

ワン吉君。
あれ？あの子、今日夜勤明けだったけ？
まあ、元気そうだから、良しとするか。

さて、と。

もしも、本当に『声』が聞こえるのであれば……。
もしも、本当に、その『想い』を知ることができるのであれば……。

私には、知りたい『想い』があった。

それは、荘ちゃんの『想い』。
荘ちゃんは今も、お母さんを愛していますか？
二人の関係は、手遅れにはなっていませんか？

もし、荘ちゃんが、まだ、お母さんのことを愛しているならば、あとは、静香さんの気持ち次第だ。

でも、もし、荘ちゃんがお母さんのこと嫌いになっていたら？無関心になってしまっていたら？

気付くと私はコーヒーを手にしていた。
どうやら、私が考え込んでいるうちに、ワン吉君は戻ってきていたようだ。

「あの、さ」
真実を知りたいのに、真実を知るのが怖い。
それでも、私はもう、動き始めてしまったのだから……。

「笹岡君って、ＮＩＣＵで働いてるよね？」
「はい。」
「じゃあ、もちろん、荘ちゃん、中山荘太君、知ってるよね。」
「はい、もちろん。」
「笹岡君から見て、荘ちゃんは、どんな子？」
「あぁ、荘太ですか？」
ワン吉君は、あまり考え込む様子もなく、すぐに答えた。
「態度はでかいけど、」
予想だにしていなかった答えに、思わずコーヒーを吹き出しそうになった。
荘ちゃん、可愛い顔して態度でかかったのね！

「仲間思いだし、リーダーシップもある、良い奴ですよ。」
ワン吉君の顔を見た。
優しげな瞳でそう語る彼の言葉に、嘘はなさそうだった。

荘ちゃんは、いい子に育ってるんだ。
だったら、きっと、お母さんのこと……。
そう思いつつも、不安を拭いきれない。
だって、荘ちゃんは、一年近くお母さんに会っていない。
もしも、嫌いになってしまっていたら？
もしも、無関心になってしまっていたら？
荘ちゃんのお母さんにあと少しの勇気が足りないだけなのに、荘ちゃんがもう、お母さんのことを諦めてしまっていたら？

聞くのが怖い
でも、聞かなければ始まらない。

「荘ちゃん、は、さ、お母さんの事とか何か言ってる？」

ワン吉の顔が曇った。
もしかして、荘ちゃんはお母さんのこと嫌いになってるの？
「荘太から、荘太のお母さんの話は、あまり聞いたことがないです。」
そうか、無関心、なんだ。
そうだよね、一年近く会っていないんだもん。
「けど、俺が見る限りでは、荘太は、お母さんのこと、大好きなんだと思います。」
無関心、ではなかった。
嫌いにも、なっていなかった。

生まれてから、たった一度しか会っていない母親を、荘ちゃんは、愛しているのだ。
こんな奇跡みたいなことが、この世に存在するんだ。

しかし、私は、ある事実を思い出した。

静香さんは、第二子を身ごもっている。
それは、荘ちゃんにとって、どれほど残酷なことだろう？

「ねぇ、荘ちゃんはさ、その、お母さんの、に、妊娠の事、知ってるの？」
笹岡君の顔色をうかがうことすら恐ろしかった。
さっき、あんなに嬉しそうに荘ちゃんのことを語っていた彼が、初めてそのことを知るなら、相当怒っているに違いない。
「知ってますよ。」
その声色に怒っている様子はなかった。

でも、少しだけ冷たいその声色に、顔を上げられなかった。

たぶん、笹岡君は、荘ちゃんのお母さんの第二子の妊娠を快く思っていない。

じゃあ、荘ちゃんは？

「荘ちゃんは……何て？」

「『仕方ない』って。」

……仕方ない？

思わず、顔を上げてワン吉君を見た。

穏やかなワン吉君の目に、嘘はなさそうだった。

仕方ない。

独りぼっちでＮＩＣＵで闘病生活を送っている荘ちゃんは、一年近くお見舞いに来ないお母さんが、弟を身ごもっているという事実を、悲しむわけでも怒るわけでもなく、冷静に受け止めていた。

荘ちゃんはわかっているんだと感じた。

お母さんとおばあちゃんの間の亀裂が自分のせいで深まったかもしれないことも。

中山家に、跡継ぎ、が生まれなければ、お父さんとお母さんが、別れさせられてしまうことも。

超低体重出生児として生まれた自分は、跡継ぎにふさわしくないと思われているだろうことも。

荘ちゃんは、独りぼっちで闘病生活を送りながら、家族の幸せを願っていたんだ。

大好きなお母さんのために、家族の幸せのために、寂しさに一生懸命耐えているんだ。

何て優しい子なんだろう。
なんて素敵なことなんだろう。

荘ちゃんは、今も、お母さんのことを愛している。
あとは、お母さん次第。

私は、私にできることをしなきゃ。
二人の幸せのために、何かしなきゃ。

いつの間にか流れていた涙を拭うと、私はワン吉に手を振った。
私の診察を希望してくれた、静香さんのために、ＮＩＣＵで頑張る荘ちゃんのために、何かをしなきゃ。

そして、決意を胸に歩き始めた。

## 翠先生の女子力

「はい、チーズ！」
迷わずシャッターを押した私は笹岡君に聞く。
「荘ちゃんは、何て言ってた？」
「『翠先生最近、それ、好きだな。』って。」

荘ちゃんの言うとおりだ。
最近、写真を撮りつつ、笹岡君に『通訳』してもらうのが、日課になっている。
表向きは、そういうことにしている。

あの日、笹岡君から荘ちゃんの『想い』を聞いてから、私は私なりに、自分に何ができるか考えた。
荘ちゃんは、まだ、お母さんのことを諦めていないんだもの、あとは、お母さんの、静香さんの気持ち次第。
静香さんの中ではまだ、荘ちゃんは、機械に繋がれて生かされているような、超低体重出生時のままなんだ。
だから、きっと、会いに行くのが怖いんだ。
だから、荘ちゃんが、今はちゃんと大きくなっているってわかれば、荘ちゃんに会いに来たくなるに違いない。

そんな確信の元、私は、ほかのベビーの写真も撮りつつ、荘ちゃんの写真を撮っていた。
次の診察が、少し楽しみだ。

「先生、またＮＩＣＵ行ってたんですか？」
ＮＩＣＵから戻ってきた私は舞ちゃんに話しかけられた。
「まさか、先生、笹岡君と付き合ってたりしないですよね？」

何だか、舞ちゃんの視線が怖い……。
「違う違う。赤ちゃんの写真を撮ってるだけだよ。」
「へぇ……。」
舞ちゃんはなおもいぶかしげな瞳で私を見つめていた。
「舞ちゃん、もしかして、笹岡君が好きなの？」
「あんなの好きになるわけないじゃないですか？先生だって私が面食いなの知ってるでしょ？」
即答、かつ、即否定だ。
この場に笹岡君がいなくてよかった。
「ところで、翠先生、今日の服、気合入ってません？」
舞ちゃん、目ざとい。
「そ、そうかな？あ、私、あの、用事があるから、舞ちゃん、夜勤、頑張ってね！」

危ない危ない。
舞ちゃんが夜勤じゃなかったら間違いなく尾行されてた。

今日の私には、服装に気合が入る理由も、舞ちゃんに尾行されては困る理由も十分にあった。
今日は、舞ちゃんにはまだ内緒の彼とのデートだからだ。

高層ビルが建ち並ぶオフィス街。
その中でも際立っているビルの最上階。
たぶん、ここら辺で一番夜景が綺麗に見えるバーだ。
彼はいつも夜景がきれいに見える窓際のテーブルではなく、バーテンさんとたっぷり話せるカウンター席に座っている。
そして、ここが、私と彼のいつもの待ち合わせ場所だ。

今日もいつもの場所で彼はグラスを傾けていた。
何だかこの店に親近感がわくのは、このお店のカウンターが、いつも行く病院の近くの居酒屋のカウンターと造りが似ているからかもしれない。
ふと、少し前にその居酒屋のカウンターに座っていた二人を思い出した。
纐纈先生と、笹岡君。
纐纈先生は、こういう店のカウンターに座っててもに絵になりそうだけど、笹岡君は……入り口で硬直してそう。
「いらっしゃいませ。」
落ち着いた声で店員があいさつした。
ワン吉君だったら、この落ち着きのある挨拶にすら挙動不審になっていそう……。
おしゃれなバーと挙動不審なワン吉君のアンバランスな光景を思い浮かべて笑いそうになっていたときに、彼がこちらに気付いた。

「何か、可笑しかったかい？」
穏やかな笑顔で、彼が私に問いかけた。
「ううん、ちょっと最近面白いワンちゃんに出会ってね。」
彼の質問に答えながら、私は荷物を置いてその隣に腰かけた。

私の隣で穏やかな笑顔を見せる男性は、水口卓也、３８歳、弁護士。
年上で、包容力があって、私の医者という職業に引け目を感じることなく対等に付き合ってくれているし、仕事を優先しがちな私を暖かく見守ってくれているし、束縛とかはされないし、私の好みに一番しっくりくるし、というよりもむしろ、この上ない人だと思う。
こういうのが、運命ってやつなのかもしれない。

「……たっけ？」

「ん？」
「翠のマンションって、ペット大丈夫だったっけ？」
あ、いけない！生物学的には人間だっていうの忘れてた！

「あ、卓也さん、あのね……。」
その時、私の携帯が鳴った。
「もしもし、あ、舞ちゃん、どうしたの？……え？湯川さんが？」
心配そうにこちらを見る卓也さんと目が合った。
「……うん、今から行くから。」
私は立ち上がり、卓也さんに目で詫びた。
「小児科と心臓外科と循環器内科には連絡した？……よし、あと15分くらいでそっちに行けるから。うん、じゃあね。」
通話を終えた私は、卓也さんに再び謝って、店を後にした。
デート中の急な呼び出しでも、広い心で許してくれる卓也さんは、本当に最高のパートナーだと思う。

タクシーを捕まえて、病院に向かう頃には、私の頭の中は患者さんのことでいっぱいになっていた。

湯川彩月さん。
すごく、明るくて素直で天真爛漫な人だ。
自らも心疾患を抱えている彼女の妊娠は、今回が二度目だ。
一人目のお子さんは、順調に生まれ育っていて、その経験から、当初は今回も大丈夫なんじゃないかと甘く考えていた。

ところが、循環器内科医から、湯川さんの心臓の状態は初産時よりかなり悪化していると告げられた。
さらに、胎児心エコーをした小児科医から、胎児の心臓には重篤な心疾患がありそうだと告げられた。
正直なところ、リスクはかなり高い。

さっきの電話は、その彼女が、破水したとの連絡だった。
どうか、どうか、二人とも、無事でいて！

「先生……翠先生ってば！」
いつの間にか眠っていたらしい私は、舞ちゃんに揺り起こされた。
時計を見る。
午前４時。
そうか、あれから、急いでオペ室に入って、母子ともに何とか、本当に何とか命を繋いで、安心感と疲れから急に眠気に襲われたような……。

「先生、まさか、お化粧落とさないで寝たんですか？」
「ん……そうかも？」
「せ、先生！何て事を！お肌が……！お肌の曲がり角が……！毛穴が……！」
慌てふためいている舞ちゃんをよそに、私は休憩室に貼ってある病院の最寄り駅の時刻表を見つめていた。

「先生、聞いてます？」
「うん、一度始発で家に帰ることにするよ。」
少しの沈黙の後、舞ちゃんが呆れ顔で大きくため息をついた。
「気を付けて、帰ってくださいね。」
「うん、またね！」

始発までは、あと１５分ちょっとあるから、ダッシュで着替えてダッシュで駅まで行けば……。
そんなことを考えながらロッカーを開けた。

うわ、着にくそうな服。
誰だよこんなの着てきたの。
私だよ。

そうか、デートの日だったから。

デートを邪魔された怒りよりも、着るのがめんどくさい服のせいで時間をロスすることに怒りが込み上げてきた私の女子力は、きっとかなり低い。

**見たいのは……**

「次の人、どうぞ。」
形式上、そういって患者を招き入れるが、次の患者が誰なのかは、わかっている。
横目でちらりと、デジカメを確認した。
フル充電にしてあるし、荘ちゃんの笑顔をばっちり捉えている。
準備は万端だ。

ただ、この、一番のナイスショットのシャッターを押したのが、ワン……笹岡君ってのがちょっと気に入らないけど。
まあ、ベストショットはベストショットだからね。

静香さんが入ってきた。
「義母は、待合室で待っているそうです。」
「そう……。」
邪魔が入らなくてちょうどいいや、と、思わずデジカメに手が伸びそうになる。
……と、その前に、診察をしなきゃね。

「お腹の子、順調ですよ。」
そう言って、エコーの写真を静香さんに手渡した。
順調、という響きに思わず静香さんの表情が綻んだ。
よし、今だ。

「最近、私、産科病棟とかＮＩＣＵとかの赤ちゃんの写真を撮るのがマイブームなんですよ。」

ちらりと静香さんを見た。
ＮＩＣＵという言葉で、荘ちゃんを連想したのか、少し呆然としている様子だった。
きっと、写真を見たら嬉しいから、きっと、元気な荘ちゃんを見たら会いたくなるから、だから、大丈夫。
そう自分に言い聞かせてデジカメに手を伸ばした。

「でね、荘ちゃんのベストショットが撮れたから、静香さんにも……。」
「いいです！」

……へっ？

「いらないです！あの、ごめんなさい、本当に、いらないです。」

何で？
どうして？

「あの、ごめんなさい。失礼します。」
そう言ってぎこちなく頭を下げると、静香さんは診察室から出て行ってしまった。

もしかして、写真すら見たくなかったのだろうか？
彼女の脳裏にはまだ、生まれたばかりの壊れそうな荘ちゃんが焼きついたままなのだろうか？
それとも、もう、静香さんにとって、荘ちゃんはどうでもよくなってしまったのだろうか？

静香さんの、心の傷は、写真云々でどうにかなるものではなかったんだ。

私の頑張りはすべて裏目に出た。
心にぽっかり穴が開いたような喪失感を感じながら、私は、自分の浅はかさを呪った。

「お疲れ様でした！」
「舞ちゃーん！」
爽やかに別れの挨拶をしてきた舞ちゃんに泣きついた。
「先生、ごめんなさい、今日は大事な用事があるので失礼します。」
この笑顔、そして、このテンション。
……十中八九、デートだな。

今日に限って、皆、帰るのすごく早い……。
舞ちゃんに見放されて、誰もいなくなった外来受付で私はぼうっとしていた。

「……先生！」
あれ？ここは産婦人科の外来受付のはずなのに、ワン吉の声が聞こえた気がする。

「翠先生！」
また幻聴が聞こえた。
この際ワン吉でも誰でもいいから、このもやもやした気持ちを聞いてほしい……。

「翠先生、どうしたんですか？」
「あれ？笹岡君？」

肩をたたかれて振り返ると、そこには正真正銘本物の笹岡君がいた。

「先生、ちょっと、聞きたいことが……。」

「よし、笹岡君、飲みに行こう！」

捨てる神あれば拾う神ありというのは、まさにこのことだね！

重大なミステイクに気付いたのは、居酒屋のカウンター席にワン吉君と座ってからだった。

私、ワン吉君に、荘ちゃんと静香さんの作戦について一度も話したことなかったんだった。

今から話すのめんどくさ……。

「先生、」

めんどくさい病を発症する直前に、ワン吉君が話しかけてきて、私は顔を上げた。

「今日って、荘太の母親の診察、ありました？」

「何で知ってるの？」

反射的にそうは言ったものの、よく考えたら電子カルテで見たら一目瞭然よね。

「今日、それらしい妊婦を見かけたんです。」

何だ、野生の勘か。

私はビールに口を付けた。

「ＮＩＣＵの前で。」

その発言に、思わずビールを飲み下した。

そして、むせた。
「ほ、ホントに？」
しばらく咳き込んだ後、ようやく私はそれだけ言った。
「胎児の『声』は、すごく荘太に似てましたけど？」
しばらく黙りこんだ後、ワン吉君は再び口を開いた。
「荘太の母親、薄い緑のワンピース着てませんでした？」
「……着てた。」
ちょっと、奇抜な色だなと思った覚えが確かにあった。
じゃあ、もしかして、静香さんは、荘ちゃんの写真を見るのが怖かったわけでも、興味がなかったわけでもなかったってこと？
写真の荘ちゃんじゃなくって本物の荘ちゃんに会いたかったってこと？
もう少しで、ほんの少しの勇気で、荘ちゃんに会えるところまで来てたんだ！
私も、めげずに頑張らなくちゃ！
静香さんが、あと少しの勇気を振り絞れるようにお手伝いしなきゃ！
なんか、無性に嬉しくなってきた！
「ワ……」
「……わ？」
「笹岡君、乾杯しよう！」
危ない危ない。
「へっ？」

「かんぱーい！」
「え？は、はい、乾杯！」
沈み込んでいた気持ちが一気に浮上して、何だか楽しい夜だった。

## 衝撃告白

湯川さんは、いつも天真爛漫で、笑顔の可愛らしい人だ。
回診に行けばいつも、たとえ自分の体調がすぐれなくとも笑顔で迎えてくれる、そんな人だ。

その湯川さんの病室に入ったはずなのだが、応答が、ない。
……まさか、病室で倒れてる？

慌てて病室に駆け込むと、湯川さんは普通に起きていた。
「湯川さん？」
「……はい。」
いつもはこちらを振り返って笑顔を見せてくれる湯川さんが、こちらに見向きもせずに、返事をした。

どうしたの、湯川さん？
私、何かした？
私、何かやっちゃった？

いや、でも、ここでひるむわけにはいかない。
私は主治医。
彼女の愛想がよくないのは、体調不良のせいかもしれないじゃない。

「湯川さん、調子はいかがですか？」
「……たぶん、大丈夫です。」
た、たぶんって……。
そして、やっぱり、こっちを見てくれない。
ふと視線を下げると、彼女の手元が見えた。

慣れた手つきで、一つ、また一つと鶴を折っている。

「鶴……ですか？」

「崇が明日、オペなんです。」

一つ、また一つと鶴を折りながら、答えた湯川さんの言葉を聞いて、私は、思い出した。

明日、湯川さんの息子の崇君は、心臓の大手術を受けるのだ。

机の上には、まだ折られていない状態の折り紙が大量にあった。

「最近、体調が優れない日もあったから、なかなか進まなかったんです。」

私の視線に気付いたのか、湯川さんが呟くように言った。

たぶん、体調が優れないのは今もだろう。

そう話した彼女の顔色もあまり良くない。

あまり無理を強いるのは危険だ。

それに、見てしまったからには、手伝わないわけにはいかないでしょ？

幸か不幸か、今日の病棟は、とても平和で、ナースステーションでナースたちが雑談しているほどだった。

「皆！千羽鶴、折るよ！」

それをいいことに、私は机の上に折り紙の束を置きながら言った。

「え？鶴ですか？」

「明日、湯川さんの息子の崇君のオペだから！急がなきゃ間に合わなくなっちゃう！」

「そういえば、明日オペみたいですね。」

「折り紙とか懐かしい！」
「折り方覚えてないですよ。」
皆口々に言いながら、折り紙を手に取っていた。
「うわ、くちばしが変な形になった！」
「みんな、何でそんなにきれいに折れるの？」
「翠先生の折り方が雑すぎるんですよ。」
和気あいあいと、ナースステーションでの折り鶴が始まった。

折り始めてから数時間が経過した。
日勤の子から夜勤の子に引き継いでもなお、皆で暇を見つけては鶴を折っていた。
病棟の患者さんが寝静まる頃、ナースステーションではただひたすら黙々と、鶴を折り続ける私とナースたちがいた。

「何だかだんだん形が崩れて言ってる気がする。」
「大丈夫です、翠先生のは最初から崩れてます。」
「それ、フォローになってない！」
「何だかだんだん私の鶴も翠先生化してきた……。」
「それ、フォローになってない！」

ナースの一人が時計を見て立ち上がった。
「あ、巡回！」
「私が行きます！」
「いや、私に行かせてください！」
「いやいや、私が行きます！」

このパターンって、もしかして……。

「じゃあ、私が……。」
「何言ってるんですか、翠先生、先生が言い出したんですから、先生は鶴を折ってください。」
あ、そういうパターンじゃなかったのね。

結局、この中で一番の先輩ナースが巡回に行き、私と残ったナースは、折り鶴を再開した。

巡回に行っていたナースが戻ってきた。
戻るや否や、彼女はさっきまでよりも真剣な表情で、鶴を折り始めた。
「特に異常はなしですか？」
「ない。湯川さんがまだ起きてて、私たち全員がこれまで折ったよりもずっとたくさん鶴が出来上がってたの。負けてられないっていうか、これ以上無茶させられないっていうか……。」
後輩ナースの問いかけに答えながらも、彼女は一心不乱に鶴を折っていた。
消灯時間をとっくに過ぎているというのに、湯川さんは今でも眠い目をこすりながら鶴を折っているのだ。
今日の回診の時もあまり顔色は良くなかった。
私たちが、頑張らなきゃ。
私たちは、より一層、折り鶴に励んだ。

「終わったー！」
時計を見た。
午前４時。

「これ、湯川さんの病室に持っていきますね！」

「私も行く！」
やっと、千羽鶴が完成するんだ！
楽しみ！
「先生はダメ！いい加減、寝てください！」
「明日も外来でしょ？って、もう今日ですけど。」
「でも、でも、完成が……。」
「いいから寝てください！」
ナース全員の迫力に負けて、私はひと眠りすることにした。

目が覚めて、時計を見たら、６時だった。
１～２時間は寝たってとこかな？
起き上がった私は白衣を羽織りながら、産婦人科病棟へと向かった。

「皆、おはよう！」
「あ、翠先生、おはようございます！」
「ところで、鶴は？」
「ちゃんと、ＮＩＣＵに持って行きましたよ！」
「そうなんだ！ちょっと見てくる！」
私たちの血と汗と涙の結晶、千羽鶴の行く末を見届けないわけにはいかない。
明日は静香さんの診察もあるから、荘ちゃんの様子も見ていこうかな？
「皆、おはよう！」
あれ？ワン吉君がいる！

もう、いるってわかってたら手伝わせ……手伝ってもらったのに。

千羽鶴はちゃんと、崇君のベッドにくくりつけられていた。

よしよし。

崇君、頑張るのよ！

で、荘ちゃんは……。

「翠先生！」

ん？どうしたワンき……。

「好きです！」

……はい？

## ズルい女

窓から光が差し込んでくる。
そうか、朝か……。
何だかあまり、眠れなかった気がする。
昨日だって、ちょこっとしか寝てないのに……。
今日の寝不足の原因は、わかっている。

それは、昨日の朝のことだった。

「翠先生、好きです。」

それは、唐突過ぎる、ワン吉からの告白。

頭が真っ白になった。
嬉しかったとかそういうわけではなく、ただ、混乱した。
だって一度も、ワン吉を恋愛対象としてなんて見たことなかったから。
ワン吉は、私にとって、赤ちゃんの『声』を通訳してくれる存在。
ただ、それだけなんだ。

彼氏がいる私には、その想いに応えるわけにはいかない。
いつもの私なら、そういうめんどくさい相手は、すぐにキッパリ切り捨ててしまう。
それができない理由に私はもう気付いている。
ワン吉君しか、いないのだ。
私の周りで、赤ちゃんの『声』が聞こえる人間は。

その想いには応えられない。

でも、赤ちゃんの『声』を通訳してほしい。
どちらか一つを選べない私はすごくズルくて、ワン吉の気持ちや、卓也さんの事や、自分の身勝手さを、私はずっと考え込んでしまっていた。

「次の人、どうぞ。」
そう言いながらデジカメを患者さんの目の留まりそうなところに置いた。
あれだけ近くに歩み寄れたんだもの。もしかしたら今日は、写真でもいいから見たくなるかもしれない、という、仄かな期待とともに。
本当は今日の荘ちゃんの体調とかを聞きたかったけれども、私はＮＩＣＵに近寄ることすらできなかった。

ワン吉に、どう接していいかわからないままだったから。

静香さんの瞳は、一瞬デジカメをとらえた。
しかし、それからはずっと、私の目も、カメラも極力見ないしているようだった。
それが、すごく寂しかった。

診察を終えて、静香さんが部屋を出た。

今日こそは、ＮＩＣＵに行くだろうか？
それとも、もう、行ったのだろうか？

聞きたいけれど、聞けない。

何だかすごく重たい気持ちになりながら、廊下を歩いていた。
ふと顔を上げると、こちらに向かって歩いてくるワン吉が視界に入った。

……ヤバい。
逃げよう！

「翠先生！」
こら待てワン吉、何故追いかけてくるんだ！
廊下を走るな！
って、それは私もか……。
でも、ワン吉君、オペ百戦錬磨、長時間立っていたって全然へっちゃらな私の体力をなめてはいけないよ。

走り始めて少し時間が経過した。
ワン吉君は懲りずに追いかけてきている。

この頃私は、重大なミステイクに気付き始めていた。
オペ中は立ちっぱなしだけど、走ることはほとんどない。
何だか息が切れてきた。

よくよく考えてみたら、睡眠不足も、荘ちゃんの様子を聞けなかったのも、こんなところで体力を消耗しているのも、早くも息切れして歳をとったことを実感させられているのも、全部、ワン吉のせいじゃない！

だんだん、ワン吉の足音が近づき、とうとう私は捕まってしまった。

告白の返事なんて、できないよ。
それは私のワガママだってわかってる。
でも、私は、ワン吉の好き、の気持ちには応えられない。
でも、私は、ワン吉との今の関係を終わりにしたくない。
私はなんて、ズルいんだろう？
私はなんて、汚いんだろう。

どうしよう、どうしよう……。
まとまりきらない考えがぐるぐる回る中、ワン吉の声が聞こえた。

「先生のカメラに用事があるんです！」

私にじゃないんかい！
それならそうと、早く言え！
そんでもって、ここまでダッシュして、疲弊した体力、返せ！

「……カメラ？」
「崇の写真、入ってたら現像してほしいなと……。」

なんだ、そういうことか。

昨日は湯川さんの息子の崇君のオペの日だった。
皆で千羽鶴を折った。
オペに間に合って、すごく嬉しかった。

それなのに、崇君はオペの甲斐なく帰らぬ人となってしまった。
今、悲しみに暮れているお父さんやお母さんに、崇君は最期に何て言ったんだろう？
目の前には、ワン吉君がいて、聞こうと思えば聞ける距離。
聞けるものなら聞きたい。
でも、今は、きまずい。

プリントアウトを終えて、ワン吉君に写真を手渡した。

「ありがとうございます。」
「いえいえ。」
告白などなかったようにいつも通りに振る舞うワン吉。
でも、私は一方的に気まずくて、崇君が何て言ってたか、とてもじゃないけど、聞けなかった。

医局の扉に手をかけたワン吉君は、振り返った。
「先生、俺、」
や、やっぱり、告白の返事を聞かせろって言ってくるの？
今までの関係ではいられないのが必須事項なの？
「俺、昨日の返事を聞けないことよりも、先生に無視されるほうが、キツいです。」
そ、そんな、捨て犬みたいな目でこっちを見ないで！
私だって、ワン吉君を避けてる間、色々と不便な思いをしたんだから！
「じゃあ、俺、行きます。コレ、ありがとうございました。」
ワン吉君は、写真をかざしながらそういうと、今度こそ部屋から

出て行った。

少しだけ、猶予がもらえたってことかな？

私は、まだまだワン吉君に赤ちゃんの『声』を通訳してほしい。

ワン吉君だって、私に無視されるのはキツいって言ってたんだもの。

お互い、まだ、今のままの関係でいいってことなんだよ。

告白の返事を要求される、その時まで。

その時が来なければ、いいのにと思ってしまう私は、ズルい女だ。

## 写真の行方

午後の診察を終えた私は、湯川さんの病室へと向かった。

笹岡君に写真を渡したのはお昼頃だったから、きっと今頃は湯川さんのもとに写真が届いているはずだ。

「あ、先生、色々とありがとうございました。」

湯川さんは荷造りをしている手を休めて顔を上げた。

彼女は、崇君のお葬式のために一時帰宅をすることになっていた。

次に病院に戻ってくるときは心臓外科病棟に転棟するはずだから、きっとこれまでのように接することはなくなるだろう。

彼女の足元に置いてある紙袋の中に、千羽鶴を見つけた。

「あ……。」

思わず声を出してしまった。

「崇の棺に一緒に入れようと思って……。」

そういうと、湯川さんの瞳が潤み始めた。

「あ、あの、そういえば……」

私は必死に話題を変えようとした。

「今日、写真、渡されませんでした？」

「え？……写真？何のことですか？」

……あれ？

おいこら、ワン吉、仕事しろ！

その日、私は仕事が終わるとともに、ＮＩＣＵへと向かった。
ワン吉は、あの後も、湯川さんに写真を渡しには来なかった。
写真は、私がもう一枚プリントアウトして渡したからいいけど……。
ワン吉め、私に猛ダッシュさせて慌てさせておきながら……！
ちょうど私がＮＩＣＵの入り口に到着した時に、ワン吉君が出てきた。
ふっふっふ。
ちょうどいいところに出てきたじゃあないの。
この翠先生を怒らせたこと、せいぜい反省するがいいわ、ワン吉。
「笹岡君、飲みに行こう！」
敵に逃げられちゃあ困るので、とりあえず笑顔で話しかけた。
罠にかかったが最後、私の説教地獄が待っているんだから。
覚悟しろよ、ワン吉！
「……はい。」
少しためらった後、短くそう答えたワン吉の顔が、少し寂しげだったことに、その時私は気付かなかった。
私たちは居酒屋のカウンターテーブルに隣り合って座った。
オーダーを終えるなり、私は笹岡君の目を見据えて言った。
「今日の写真、崇君のお母さんの手元に渡ってなかったよ！」
ワン吉は、一瞬不思議そうな顔をした。
とぼけても無駄なんだから！

「あれ、崇の母親に渡すつもりでもらった訳じゃないんです。」
「え？……じゃあ、誰に？」
「さやかに、崇の隣のベッドの平山さやかという子にあげました。」

そして、ワン吉は話し始めた。

さやかちゃんと、崇君の物語を。

ベビーたちと、ワン吉君にしか聞こえない、二人の物語を。

崇君が入院した時から、隣のベッドはさやかちゃんだった。
さやかちゃんは、聞きたがり屋の崇君の質問にいつも答えてあげていた。
それは、単にさやかちゃんが面倒見がよかったからだけじゃない。
崇君が、泣くと体調が悪くなることを知っていたから、というのもあってのことだった。

いつだって、崇君を大切にしてくれているさやかちゃんの存在は、いつしか、崇君にとって、特別な存在となっていた。

そして、崇君のオペ前夜。

崇君は、さやかちゃんへの『想い』を語った。

その想いは崇君にとって特別で、だからこそ、離れ離れになる前に、伝えたいと言ったその『想い』。

『ボクは、さやかちゃんのことが、好きだよ。』

なんて、まっすぐな想いなんだろう？
なんて、純粋な、想いなんだろう？

こんなにもまっすぐで、純粋で、綺麗な告白を、私は聞いたことがなかった。

私は今、まっすぐな想いを抱けているだろうか？
私は今、純粋な想いを抱けているだろうか？

私は今、人を愛せているだろうか？

その疑問とともに、崇君の告白は、私の記憶に残り続けた。

その、まっすぐで、純粋で、綺麗な告白は、さやかちゃんの耳にも届いていた。
きっと、さやかちゃんにとっても、崇君は特別な存在だったんだろう。
でも、崇君は、その返事を聞かないまま。
崇君はもう、さやかちゃんの隣のベッドにも、世界中のどこを探しても、どこにもいない。

「それで、気丈に振る舞ってはいるけどやっぱりさやかが寂しそうに見えて、」
笹岡君は、ビールに口をつけないまま、話し続けていた。
「写真があったら寂しくないかなと思ったんです。」
「そっか……。」
私も、ビールに口を付けることなく、聞き入っていた。
「でも、さやかに言われちゃいました。」
笹岡君は、少し、寂しそうな顔をした。
「『それは、本物の崇じゃないからやっぱり寂しい』って。」
さやかちゃんは、もう、気付いていたんだね。
写真には、間違いなく、崇君の姿が写し出されているけれど、それは、本物ではないということに。

そして、赤ちゃんは、自らの意志で言葉を発したその時に、『声』と、『声』を発していた頃の記憶を失うと聞いた。
今のさやかちゃんは、あの写真を見て、崇君との思い出を思い出すことができる。
でも、そう遠くない将来に、崇君の写真は、さやかちゃんの記憶を呼び覚ませなくなる。
あの頃の、好きの気持ちも、失った悲しみも、隣にいない寂しさも、すべて、忘れてしまう。すべて、消えてしまう。

でも、さやかちゃんが記憶を失っても、崇君がさやかちゃんを好きだった気持ちがなくならないように、あの写真が、さやかちゃんの手元にあり続けることを、心から願った。

## 秘密

今日の診察も、残すところあと二人となった。

「次の人、どうぞ。」

今日も一人で入ってくるだろうか？
今日は二人で入ってくるだろうか？

期待と不安の入り混じった眼差しで、診察室の扉を見つめた。

扉が開き、妊婦が入ってきた。
そして、その後ろに、当然のように現れた姑。

思わず、ため息が出そうになった。

「中山さん、調子はどうですか？」
「母子ともに良好でございます。」
姑の志乃が歯切れよく答えた。
……貴女には、聞いてないです。

ここで、喧嘩しても埒が明かないことはわかっているので、私は何事もなかったかのように診察を続けた。

「お大事に。」
ため息を噛み殺しながら私が言うのを聞くが早いか、姑は、嫁を連れて診察室から出て行った。

今日も、順調だったからよかったけど、静香さんとほとんど話せ

てない。
せめて静香さん一人で入ってきてくれたら、もう少し荘ちゃんの話とかできたんだけどなぁ。
ため息ばかりついていても仕方がない。
今日はまだあと一人、診察が残ってるんだ。

「次の人、どうぞ。」
今日も二人で入ってくるのだろうか？
期待と不安の入り混じった眼差しで、診察室のドアを見つめた。

勢いよくドアが開き、妊婦の夫が入ってきた。
……今日も、張り切ってますね。
旦那さんは妊婦を招き入れるとドアを閉め、私の目の前に座った。

一瞬、言葉に詰まったが、意を決して私は言った。
「あの、川嶋さん……。」
「はい！なんでしょう？」
「奥さんの診察をしたいんですけど……。」
「……。」
「……。」
「……すみません。」

見ての通り、この、川嶋さんという人は、やる気が空回りしてしまうほどに、やる気にあふれている。
それを微笑ましく思いながらも、何だか心が痛むのは、私が、彼の、彼らの秘密を知ってしまっているからかもしれない。

今目の前にいる旦那さんには、生殖能がない。

そして、奥さんのお腹の中にいる子供の父親は、今、目の前にいる男性ではない。

顔も、名前も知らない、精子バンクの精子提供者なのだ。

川嶋さん夫妻は、悩んで悩んで悩みぬいて、それを決断した。

それでもやはり、子供が欲しかったのだ。

長い不妊治療の末、奥さんの妊娠が分かった時、旦那さんは、涙を流して喜んだ。

その涙が、奥さんが苦しみから解放された喜びのためだけでなく、子供ができた喜びのためであってほしいと願ってしまうのは、私のエゴだろうか？

彼の優しさが、彼の愛情が、本当に子供を愛しているからだと思いたいのは、私のエゴだろうか？

そう思ってしまう自分に嫌気がさした。

でも、私のエゴであっても、私は願わずにはいられない。

彼らの幸せな未来を。

「ありがとうございました。」

元気にそう言って、川嶋さん夫妻は診察室を出て行った。

誰もいなくなった診察室で、思わずため息を吐いた。
私には、赤ちゃんが元気に育っているかどうかは測れても、彼らの幸せは量れない。
ましてや未来の幸せなんて、もっとわからない。

そんな私にできることと言ったら……。
「先生、どうしたんですか？ため息なんかついて？」
この声は……ワン吉？
「笹岡君の目は、節穴なの？幸せなカップルを見て結婚したくなったからに決まってるじゃないの。」
と、勝手な妄想で返事をしたのは舞ちゃんだ。
「そ、そうなんですか？」
「大丈夫、相手は笹岡君じゃないから。」

そう、こういう能天気な人に、うっかり秘密を話さないことだ。

それは医者としての私の義務だから。

そして、私が口をつぐんでいれば、この秘密は永遠に、封印されるはずだから。

## 『悲鳴』

「笹岡君、この子は何て言ってる？」
「『翠先生、今日は写真しないの？』って言ってます。」
「今日はカメラ忘れてきちゃったのよ！じゃあ、この子は？」
「……『翠先生、元気？』って、言ってます。」

今の少しの沈黙、そして、あの微妙な表情、多分嘘だ。

ＮＩＣＵに来ることが増えたせいか、私は、ワン吉が嘘をついている時を見破れるようになった。
きっと、『翻訳』することをためらうようなことをあの子たちが言っているんだろうから、追及はしないけど、嘘をつくとき、大抵ワン吉は少し困ったような顔をしている。

「さてそろそろ帰るか！」
私がそう言ったその時、急にワン吉は悲壮な顔をした。
どうしたの、ワン吉？寂しいの？
でも、その視線の先は、私ではなく、病院の外を向いていた。

「どうしたの？」
「……。」
沈黙の中、ＰＨＳが鳴った。
「はい、谷岡で……え？うん、わかった、今いく！」
私は黙ったままのワン吉を置いて、救急外来へと向かった。

妊婦が運ばれたから来てくれ、としか言われなかった。
でも、救急外来に近づくにつれて、状況はかなり悪そうだと悟った。

女性の悲鳴じみた泣き声が聞こえてきたから。

「ねえ、ねえ、先生！さっきまで、この子、動いてたのよ！」

叫ぶように、話しかけるその声に、聞き覚えがあった。

「ねえ、この子の写真だって見たんだから！今日見たんだから！」

そうだ、私は今日、この妊婦の診察をしたんだ。

「あ！翠先生！翠先生！助けてよ！お腹の子、助けて！この子が死ぬなんて、イヤ！」

怪我だらけになりながら、頭から血を流しながら、妊婦が叫んでいた。

呆然とする私に看護師が駆け寄って言った。

この妊婦は、先ほど、交通事故に遭ったのだと。

お腹の子は、絶望的だと。

外でサイレンの音がした。

聞きなれた救急車のサイレンの音ではない。

きっと、パトカーだろう。

サイレンの音が遠ざかって行った。

ふと、窓の外を見た。

外は暗くて、街の明かりだけがぼんやり見えた。

風景の代わりに、自分の姿が窓の中に映し出された。

窓に映った自分の顔を見て、ふと、さっきの、ワン吉の悲壮な表情を思い出した。

ワン吉も、さっき、こんな顔をしてたっけ。

鎮静剤が効果を現したのか、妊婦の叫び声は聞こえなくなってい

た。

そっと、妊婦のそばに寄った。
妊婦は、静かに泣いていた。

「本当は、私が、いけないんです。」
妊婦は、私から顔を逸らしてぽつりと言った。
「旦那が帰ってきてから買い物に連れて行ってもらえばよかったのに、自分で運転なんかしたから……。」
私に背を向けた妊婦の肩が、小刻みに震えていた。
「この子にもしものことがあったら、私のせいなんです。」

そんなこと、ないと言いたい。
そう言っても、母親は思い悩み続けるだろう。
あの時、足りないものに気付かなかったら。
あの時、買い物に行こうと思い立たなかったら。
あの時、旦那さんを待とうと思っていれば。
あの時、違う道を選んでいれば。
ずっと、後悔し続けるかもしれない。

そんなことない。
私はそう思う。
でも、彼女にとって、それは、ただの気休めだ。

「谷岡先生、ちょっと、いいですか？」
真面目に話しかけられて驚いて振り返ると、そこにワン吉がいた。

救急外来から少し離れた廊下に、私とワン吉はいた。

「先生に、伝えなきゃいけないと思ったんです。」
ワン吉は、私がＮＩＣＵを出る前のような悲壮な表情はしていなかった。
むしろ、少しだけ、いつもの優しい表情に戻っていた。

「彼女の、遺言を。」
……彼女？遺言？
「お母さんが、子供を助けて、って言っているお腹の中で、赤ちゃんは、『お母さんを助けて』って、叫んでいたんですよ。『悲鳴』をあげながら。」
……『悲鳴』？

「赤ちゃんの、その命が絶えそうなとき、赤ちゃんは、俺とかあいつらだけにしか聞こえないような『悲鳴』をあげるんです。」
『声』が、聞こえる人にしか、聞こえない、『悲鳴』。
生きたい気持ちと、死への恐怖、捨てたくない希望と逃れられない絶望、たくさんの気持ちが入り混じり、それは、断末魔の叫びのような恐怖の旋律を奏でる。
その、『想い』の塊は、耳を塞いでも、心に直接響いてくるんだ、と、ワン吉は言った。

「お腹の子は、『悲鳴』をあげながら、言ってました。」
いつものような優しい表情に、少しだけ憂いをひそめながらワン吉は続けた。
「『ママ、大好きだよ。ママ、生きて。』そうやって、ずっと、ずっと、お母さんがお腹の子を助けてって泣き叫ぶ中、言い続けてたんです。」
お腹の子の願いは、たった一つだった。

お母さんに、生きてほしい。

お母さんが、大好きだから。

「お腹の子は、最後の最後まで、『ママ、大好きだよ。』って、言ってました。」

あの時、足りないものに気付かなかったら。
あの時、買い物に行こうと思い立たなかったら。
あの時、旦那さんを待とうと思っていれば。
あの時、違う道を選んでいれば。
ずっと、後悔し続けるかもしれない。

でも、そんなことはないんだ。
赤ちゃんの願いは、ただ一つ。
お母さんに生きてほしかった。
大好きで、大好きでたまらないお母さんに、生きてほしかった。

それは、気休めなんかじゃない。

真実なんだ。

「じゃあ、俺、帰ります。」

そう言うと、ワン吉は、その場を去って行った。

ふと、窓を見た。
窓に映った私は、もう、悲壮な顔をしていなかった。

私は、歩き出した。
絶望に打ちひしがれる、彼女の元へ。
気休めではなく、真実を、伝えるために。

## 苦悩

「先生それ……。」
受付の子が私が手にしているものをちらりと見た。

「リ●ビタンＤですか？」
「リポ●タンＤですよ。」

私は、先月学習した。
これから診察する、最後の二組には、気合が必要だ。
ファイトを、一発どころか百発くらい入れなければならないのだ。

……よし。

空き瓶をごみ箱に捨てると、私はしっかりとした足取りで、診察室へと向かった。

「ありがとうございました。」
夫婦が診察室の扉から出て行った。

ものすごく気合い入れたけど、今日は川嶋さんが先だったのね。
少しだけ拍子抜けしながらカルテに記録していると、扉が開く音がした。

忘れ物でもしたのかしら？

それとも、何か質問？

軽い気持ちで振り返った私は言葉を失った。

そこにいたのは、川嶋夫妻ではなく、中山志乃だった。

「ま、まだ、お呼びしていませんけど……。」

驚きはしたが、何とか冷静に言葉を紡いだ。

中山志乃はいつも招かなくても入って来るが、さすがに呼ぶ前からフライングして入ってきたのは今回が初めてだった。

静香さんの身に、何かあったのだろうか？

ところが、中山志乃は、慌てる様子は見せず、先ほど川嶋夫妻が立ち去って行った方向を一瞥してから、私を睨みつけた。

「先生、これは、どういうことですか？」

どういうことって、どういうことですか？

「先刻、こちらの扉から、妊婦と、そのご主人が出てこられましたよね。」

中山志乃の唇は、わずかに震えていた。

「谷岡先生は、私に、診察室には原則的に患者一人で入室するようおっしゃいましたよね。」

再び私をにらみつけた彼女の迫力に気圧されそうになりながら、私も中山志乃を見つめ返した。

「生まれてくる子供の父親が入室を許されて、生まれてくる子供の

祖母である私が許されないというのは不公平です。」
いつも、許可云々とか関係なしに入ってきますよね、という言葉はぐっとこらえた。

「生まれてくる子供にとって、父親も、祖母も、同じように血の繋がりがあるのです。父親が診察室への同行を許可されるのであれば、祖母である私も、当然、同行を許可されるべきです。」

父親が、我が子を大切に思うように、祖母も我が孫が大切だ。
きっと、そう言いたかったんだろう。

それでも、その言葉が心に突き刺さったのは、私が今必死で守ろうとしている、川嶋さんの父子の絆が、弱く脆い絆が、血の繋がりがない、たったそれだけのことで、川嶋さんの力ではどうしようもなかったことで、すべてを否定されているような気がしたからだ。

今日の診察が終わった。
私は机に突っ伏した。
リ●Dでは、中山志乃にはかなわないことを悟った。

不意に背後から肩を叩かれた。

「先生、どこか具合でも悪いんですか？」
あ、ワン吉だ……。
「ワン……。」
「わん？」
「笹岡君、飲みに行こう！」
危ない、気が抜けてた。

「ふぅ……。」
反射的に、ワン吉を飲みには誘ったけれど、お酒が入っても私のテンションは一向に上がらなかった。
原因なんてわかりきってる。
でも……。

「先生、お水、頼みましょうか？」
なんだかワン吉に気遣われてる……。
「大丈夫、酔っぱらったわけじゃないから。」
ワン吉が心配そうにこっちを見ている。
何だか、飼い犬に心配されてるような気分だわ。
「俺でよければ、話とか、聞きますよ。」
ワン吉君、その気持ちは、すごく嬉しいよ。
すごく嬉しいけど、でも、話せるわけないじゃん！
私にはね、守秘義務ってやつがあるのよ！
超デリケートな問題なんだから！

でも、それでも、その優しさに一瞬、心の箍が外れそうになった。

ダメだ、これは、川嶋さんの問題は、私一人で抱えるって決めたんだ。

でも、ツライよ。
でも、苦しいよ。

「ねえ、」
気付くと私は、ワン吉に話しかけていた。
そして、そこで、自分の行動にブレーキをかけた。
「どうしたんですか？先生。」
ワン吉が不思議そうにこっちを見ている。
結構お酒を飲んでいたにもかかわらず、私の脳みそはフル回転していた。
話し始めてしまったのだから、冷静に、彼らの秘密に触れないように、聞きたいことを聞けばいいんだから。

「血の繋がりのない親子って、本当に、親として、子として、お互い愛せると思う？」
そう言って、ワン吉を見た。
「俺は、血の繋がりがあるなしにかかわらず、親と同じくらいに、大切に、想うことはできると思います。」
大切に、想う……。
友情も、恋も、相手のことを大切に想うことだと思うけど、それは、親子の絆と同じものなのだろうか？
「ベビーの話なんですけどね、」
ワン吉君、お酒入ってるからって、そんなに話が支離滅裂じゃ困るんですけど！
なぜ、いま、ベビーの話？
「その命が尽きようとするとき、あいつら、『悲鳴』をあげるんです。」

「あっ！」

「先生、覚えてたんですね。」

「うん。」

私はまだ覚えていた。

交通事故に遭ったお母さんが搬送されてきたときの、ワン吉の悲壮な表情を。

ワン吉から聞いた、『悲鳴』の話を。

赤ちゃんは、その命が尽きようとするとき、断末魔の叫びのような、『悲鳴』をあげる。

って、ワン吉、絶対私の話忘れてるだろ！

「その時、ベビーたちは、本当に大切なものの名前を叫んでるんです。」

そういえば、あのときのあの子も、『ママ、大好きだよ！ママ、生きて！』って、ずっと、叫んでたんだっけ。

「大抵叫ぶ名前は父親とか母親なんです。」

それは、本能が、そうさせているのだろうか？

血の繋がりというものが、ＤＮＡの情報が、彼らの本能にそうさせているのだろうか？

だとしたら、血の繋がりのない彼らは……？

「だから、俺、血の繋がりが、そう呼ばせてるのかと思ってました。でも、」

「でも？」

「崇の時は、違ったんです。」

崇君。
たった一か月足らずの短い生涯で幕を閉じてしまった赤ちゃんだ。
聞きたがり屋の崇君は、いつも隣のベッドのさやかちゃんに、いろんなことを聞いていたんだっけ？
さやかちゃんも、いつも、質問に答えてあげていて、二人はとっても仲良しだった。
崇君が手術で亡くなる前の晩、崇君は、笹岡君にそっと打ち明けたんだよね。
自分の、想いを……。

「崇は、悲鳴をあげながら、父親と母親のほかに、もう一人の名前を叫んだんです。」
「それって……？」

「さやかです。」

崇君が、手術の前の晩に、笹岡君に、さやかちゃんへの想いを打ち明けていたことは聞いていた。

『ぼくは、さやかちゃんのことが、好きだよ。』

それは、とても、まっすぐで、純粋で、綺麗な告白だと思った。
そして、その想いは、紛れもなく、本物だった。
自分の命が尽きようとするその時に、その名前を叫ぶほどに、本物だった。

「だから、俺は思うんです。」
ワン吉が続けた。

「血の繋がりがあるなしにかかわらず、人は、人を、大切に想うこ

とができるんだって。」
そうだ、きっと、川嶋さん親子も、大切に想いあえる。
お父さんの優しさは、きっと、伝わる。
少しだけ、気分が明るくなった。

「あ、」
「どうしたんですか？先生？」
「笹岡君、ちゃんと質問覚えてたんだね。」
「おれ、どれだけ頭悪いと思われてるんですか？」

……強いて言うなら犬レベル？

## 苦悩2

「先生、それ……。」
受付の子が私が手にしているものを見て言った。

「オ●ナミンCですか？」
「オロ●ミンCですよ。」

私は先月学習した。
これからやってくる二組に対峙するのに必要なのは、一発のファイトではなく、ハツラツな元気だと。

……よしっ！
空き瓶をごみ箱に捨てると私は診察室へと向かった。

今日は先に、中山さんね。
私は頬をたたいて気合を入れた。
「次の人、どうぞ。」
よし、来い！中山志乃！

妊婦よりも先に入ってきた姑は何だか遠巻きだ。
志乃さん、とのお年にしてやっと、謙虚さというものを覚えていただけましたか？
やや、うつむき加減になりながら、極力私から視線をそらしながら、中山志乃が口を開いた。
「あの、先生……。」

「はい。」

少しの沈黙。
中山志乃はやはり私から視線をそらしている。

そして、少し抑えた声で、中山志乃が言った。
「鼻出血を、呈しておられますが……。」
しまった！
気合入れすぎた！

「お大事にどうぞ。」

お腹の子が順調でよかった。

……けど、鼻血って……。
鼻血って……。

でももう大丈夫！
鼻栓したし！
上からマスクしてるし！

「次の人、どうぞ。」
今日も、川嶋さんの旦那さんは張り切ってついてきていた。

「先生……。」
すごく真剣な顔をして旦那さんが話しかけてきた。

「はい？」
「鼻、どうしたんですか？」
……バレてる！

ある日のことだった。
「翠先生。」
病院の廊下を歩いていた私は、ふと、背後から声をかけられた。
私に駆け寄ってきたのは、川嶋さんの旦那さんだった。
一瞬、こんなど平日に休みなのかと思ったが、よくよく考えたら、川嶋さんの奥さんは今、産科病棟に入院中だった。
「今、ちょっと、いいですか？」

私たちは病院の中庭までやってきた。
「コーヒーで、いいですか？」
「あ、僕、買ってきますよ！」
「いえいえ、そこで、待っててください。」
さすがの私にも常識というものは備えている。
ワン吉は使い走りにしても、患者さんのご家族にそのような扱いはしてはいけない。
コーヒーを２つ手にして振り返ると、川嶋さんは、俯いて、何か

考え込んでいるようだった。

「どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

私がコーヒーを差し出すと、川嶋さんは、はっと我に返ったように顔を上げた。

そして、ふと、真剣な顔をした。

「先生、」

私も真剣に川嶋さんを見た。

「先生の目には、僕は、あの子の、梓の父親には見えますか？」

梓、というのは、生まれてくる子供の名前だ。

私がうなずくと、川嶋さんは、少しはにかんだように微笑んだ。

私もつられて微笑んだ。

川嶋さんは私から視線を外してまっすぐ前を見た。

そして、ぽつりと呟いた。

「僕の目には、僕は、梓の父親には見えない。」

涼しい風が、頬を掠めた。

風が、今の言葉を消し去ってはくれないだろうか？

こんなに頑張っているこの人が、何で、こんな想いを抱かなけれ

ばならないのだろうか？

私は、川嶋さんの哀しげな横顔を見つめた。

「僕は、梓のことを大切にしたいと思っています。それに、梓のことを愛している、と、思っています。」

穏やかな表情でそう語った川嶋さんは、ふと、さっきまでの哀しげな顔に戻っていた。

「でも、時折思うんです。それは僕の思い込みなんじゃないかって。」

そして、哀しげな瞳のまま、川嶋さんはこちらを向いた。

「僕は梓と血の繋がりがないから、父親になろうと必死になってるだけじゃないかって。」

心がきゅうっと締め付けられた感じがして、私は俯いた。

血の繋がりがない、その事実は、川嶋さんの心に暗い影を落としていた。

血の繋がりがないなら、それは、本当の愛じゃないの？

心のどこかでもう一人の私が違うと叫んでいた。

違う。

違う。

血の繋がりがなくても……聞いたでしょ？

彼と、彼女の物語。

私は、顔を上げた。

「川嶋さん、」

私の声に呼応するように川嶋さんも顔を上げた。

「川嶋さんは、奥さんを愛していますか？」

「もちろんです。」

川嶋さんがしっかりとうなずいたのを見て、私はほほ笑んだ。

「奥さんと、血の繋がりがあるんですか？」

「いえ、とんでもない！」

首をぶんぶん横に振る川嶋さんに笑いかけて、私はさらに言った。

「同じことですよ。」

川嶋さんは、きょとんとした顔でこちらを見つめていた。

「血の繋がり、が、あってもなくても、川嶋さんは、人を大切にすつことを、愛することを知っているんですから。」

私は思い出していた。

ワン吉から聞いた、崇君とさやかちゃんの物語を。

人間は本能で知っているんだ。

愛するということを。

その命の灯火が尽きようとするときに、その名前を叫ぶほどに。

血の繋がりだけじゃないから。

「だから、大丈夫です。」

私は、川嶋さんの肩に手を置いた。

「私の目には、川嶋さんは、梓ちゃんのお父さんに見えます。」

私の言葉に、迷いはなかった。

「川嶋さんは、梓ちゃんを大切にできる、愛することができる、素敵なお父さんです。」

川嶋さんは、いつものまぶしい笑顔に戻って私にお礼を言うと、スキップしてしまいそうなほど軽やかな足取りで、中庭から立ち去って行った。

川嶋さんを見送ったまま立ち尽くしていた私は、ふと、誰かに肩をたたかれた。

入院患者の見知らぬおじさん。

「べっぴん先生、新しいカレシやっとできたかね。よかったよかった……。」

おじさんは一人でうなずいて、立ち去って行った。

……何のことですか？

## 罪

秋風が吹く公園を、私は駅に向かって歩いていた。

一昨日から立て続けに仕事があって、家に帰れていない、
ついてに言うと、一昨日から一睡もしていない。
帰る！
絶対に帰る！
何が何でも帰る！
そして、寝る！

決意を胸に歩いていた私の前を、しょんぼり歩いている後ろ姿が見えた。
何だかいつもよりもしょんぼり具合が増している気がするけど、
あれは……！

ワン吉！じゃなくて、
「笹岡君！」

ワン吉は少し困ったような、嬉しいような微妙な顔をしていた。
よしよし、少しかまってあげよう。
私はベンチに腰かけた。
何か、喉乾いたなぁ。
お財布を開けたら五百円玉が入っていた。
でも、一昨日から寝てないし。
昨日に至ってはほとんど立ちっぱなしだったし。
買いに行くのしんどいな……。
って、ワン吉がいるじゃん！

私は、ふと視界に入ったワン吉に条件反射的に五百円玉を差し出した。
「笹岡君、缶コーヒー2個買ってきて！」
きょとんとしているワン吉に笑いかけると、ワン吉は五百円玉を手に走って行った。

秋の朝の冷ややかな風が吹いてきた。
やっぱり、10月にもなると、朝は寒いよね。
「暖かいやつね！」
走っていくワン吉の背中に向かって私は叫んでいた。

それにしても、眠い。
今、この瞬間にも私は眠りの世界に落ちていってしまいそうだわ。
でも、風が冷たいし。
今、寝たら死ぬかもしれない。
と、とりあえず、コーヒーを待たなきゃ。

ほどなくして、ワン吉が缶コーヒーを2つ手にして走って戻ってきた。
まさしく、忠犬だね。
よしよし、忠犬ワン吉と呼んであげよう。
……心の中で。

「先生、熱いですよ、気を付けて……。」
「ありがとう……熱っ！！」
「だ、大丈夫ですか？」

そう言いながらワン吉は苦笑いした。

今、絶対人の話聞いてないとか思いやがったな、ワン吉め！

ワン吉が隣に座った。

それにしても、予想外に熱かったな、コーヒー。

「先生、」

さすがにちょっと、目が覚めたわ。

ワン吉君が何か話しかけてるけど、それよりも、タオルタオル……。

「梓のお父さんって、」

「何で知ってるの？」

思わず反射的に振り返った。

今のですごく目が覚めたわ。

そして、少し覚醒した私の目には、ワン吉がきょとんとしている様子がうかがえた。

やばい。

何か違うっぽい。

何か、違うっぽい。

とてつもなく何かが違う！

とにかく、ごまかそう！

「あ、い、今のナシ！今の発言ナシ！今の発言忘れて！さ、話、続けて！」

誤魔化されてくれたのかどうかはわからないが、ワン吉は話し始めた。

「梓が、父親の事を、『パパ』、じゃなくて『オジサン』って呼んでたから、何かあったのかな、と、思って……。」

その言葉で、私の中の何かが崩れ去った気がした。

そんなことって……。

そんなことって……。

川嶋さんはあんなに一生懸命なのに。

川嶋さんは梓ちゃんを愛しているのに……。

その想いは、梓ちゃんに届いていないというの？

梓ちゃんにとっては、所詮、他人だというの？

何で？何で？どうして？どうして？

心が壊れそうだったとでも、一人では抱えきれなかったとでも、寝不足で判断力が鈍っていたからとでも、後から、どうとでも言い

訳はできる。

ただ、その時私には、悪魔のささやきが聞こえたんだ。

どうせワン吉もいつかは勘づくだろう。

それならばいっそワン吉にも、この苦しみを味あわせてしまえ、と。

私は笹岡君に顔を近づけた。

「ねえ、聞きたい？」

聞かないで！

でも聞いて。

「梓ちゃんの、パパのこと。」

この秘密は一人で抱えなければ……。

でも、もう抱えきれない。

「聞いても、いいんですか？」

今ならまだ引き返せる。

この秘密を一人で抱え続けるという道が残っている。

心が壊れそうだったとでも、一人では抱えきれなかったとでも、寝不足で判断力が鈍っていたからとでも、後から、どうとでも言い

訳はできる。

どれだけ言い訳を並べても、真実は一つ。

「誰にも言わないって約束してくれるなら。」

私は、秘密を破って自分が楽になる道を選んだということ。

そのとき、ワン吉が私の目を見てしっかり頷いてくれたことだけが、唯一の救いだった。

なぜだか私はその時、ワン吉は信頼できると思ったんだ。

忠犬ワン吉だしね。

## 君が好きかも

ワン吉と隣り合って座る公園のベンチで、梓ちゃんのパパの話をしてからしばらく、私は呆然としていた。

そんな中、視界の端に、見覚えのある人物がいた。
中山志乃だ。

でも、今、私、中山志乃に構っている場合じゃないのよ。
秘密漏らしちゃったし。
罪悪感でいっぱいだし。
コーヒー冷めちゃったし。
……眠いし。

だから、今は中山志乃と取り巻きのセレブなマダム達の会話に聞き耳を立ててる場合じゃ……。

ほほう。静香さんに外出を控えさせているだと。
だから、静香さんが荘ちゃんに会いに行けないんじゃないか！
いや、でも、まあ、臨月だし、そう言うアレよね。
あら、いけない。私ったら、聞き耳立てちゃって……。

「一人目のお子さんのようになっちゃね、あら、失礼！」
こら、そこのマダムA！一生懸命生きている荘ちゃんに対して何てこというんだ！
今すぐ、NICUの方向に向かって土下座しろぉぉぉ！
おっと、いけない。私ったら……。

「あら、奥様、気になさらなくてよろしいんですよ。」

中山志乃のあの表情は、何か反撃を用意している時の顔だ。

「あのような子供、中山家の跡継ぎにするつもりなど、髪の毛ほども御座いませんでしたから。」

反撃する方向性間違ってる！

ていうか、あのような子供って。

あのような子供って。

……あのクソバ……（自主規制）！！！

私は思わず立ち上がった。

その時視界の隅に、私の隣で立ち上がる人影が見えた。

……ん？

そういえば、隣にワン吉が座っていたような……。

そちらを向くと、思わずワン吉と目が合った。

今の行動を踏まえまして、私、犬レベル？

冷静になれ、冷静になれ、自分。

私は再びベンチに腰かけた。

あ、ワン吉も座った。

しまった、またかぶった。

よし、今度はワン吉とかぶらないようにしなきゃ。

と、横目でそろーっと敵情視察しようと見て見たら、同じように

こちらをうかがおうとしていたワン吉と目が合った。

ワン吉、飼い主にそっくりすぎるよ！

って、飼い主、私？

ダメだ、なんか、笑えて来た！

ワン吉も笑い始めていたけれど、こみ上げる笑いが抑えきれなく

なった私は構わずに笑い転げた。

視界の隅に、公園の出口へと歩いていく中山志乃とその取り巻き

のマダム達が見えた。

「先生、怒りにいかなくてよかったんですか？」

ワン吉が私の顔を覗き込んできた。

何だか、飼い主に遊んでくれとせがむワンちゃんみたい。

今度からはフリスビーを用意しておこう。

「笹岡君こそ！」

そして、二人でまた笑いあった。

それにしても、ここ最近まともに寝てないのに、怒りつかれて、

笑い疲れて、何だか眠気がもう限界だわ。

「翠先生、」

どうしたの、ワン吉、遊んでほしいの？

もう私はフリスビーを投げる体力すら危ういわ。

「何か月か前に、俺が、告白したの、覚えてます？」

忘れていた……こともない。

ちゃんと覚えてるけど、でも、今の笹岡君との関係がすごく楽ちんで、もっとこのままでいたくて、私は告白があったことすら、記憶の引き出しの奥底に隠していたのだ。

きっと、この告白に返事をしたら、今までどおりではいられない。

眠気でまともに働いていない頭は思考力を失い、私はぼんやりとワン吉君を見つめた。

ワン吉は、ちゃんと、「待て」を続けていた。

エライエライ。

でも、何かを言わなきゃ。

「何で、」

でも、返事をする前に、一つだけ聞きたかった。

「何で、あの時、笹岡君は、好きって言ったの？」

何故、あの無謀すぎるともいえるタイミングで告白をしたかということ。

ワン吉、フラれたかったの？

もしかしなくても、ドＭ？

「崇に言われたんです。」
「崇君に？」
崇君のことは、覚えている。
「好き、の気持ちを伝えないのかって。」
崇君にはとても大切に想える女の子がいた。
「自分は、今、を生きているから、今、の好きの気持ちを伝えたいんだって。」
おぼろげな意識の中で、ふと思った。
それは、彼女が退院して会えなくなってしまうからだったのだろうか？
それとも、オペで自分が命を落とすかもしれないと、覚悟していたからなのだろうか？
「それ聞いて、思ったんです。過去も、未来も、関係ない、今、の、自分の気持ちを伝えなきゃ、後悔するって。」
「過去も、未来も、関係ない……。」
ワン吉の瞳が少し潤んでいるように見えた。
「そう、だから、先生、今、の先生の気持ち、教えてください。」
「今、の、気持ち……？」
今の私の目にはワン吉は某金融機関のＣＭのチワワにしか見えなかった。
なんか、今、すごく、ワン吉の頭をなでなでしてやりたい！
最後の理性がその衝動を食い止めている中、ぼんやりと考えた。
今の、私の気持ち？
今、私が、この目の前のチワワ君のことを好きかどうかってことだよね？

眠気が振り払えない頭で、私の中で、その質問は「好き」か「嫌い」かの、二択になっていた。

ワン吉が挙動不審になってきた。
待て、が長すぎたかしら？
その二択なら、答えは迷わないよ！

「私、」
私はワン吉君の目を見つめた。
「私も今、」
今、の気持ちでよいのなら、答えは一つ。
「私も、今、笹岡君が好き……かも。」

……犬として。

この時、もう一つの大きな罪を犯していたことに、眠気に支配された私は気付いていなかった。

## 君は忠犬かも

「翠先生！」
外来の診察を終えた私は、背後から声をかけられた。
「あ、笹岡君。」

そして、おぼろげに、記憶の中で、ワン吉に告白の返事をせがまれて、好きかも、と言ってしまった様な気がすることを思い出した。
言ったかどうかもはっきり覚えていないけれど、もし言ってたのなら、一大事だ。

だって、私には卓也さんという恋人がいるというのに、ワン吉君とは付き合えない。
もしも、誤解を招いているとするならば、それは、解かなきゃいけない。

「先生、今日、飲みに行きませんか？」
ものすごく嬉しそうに言うワン吉を見て、誤解を招いている可能性が高いと悟った。

「いいよ、行こう！」
それならば、早めに誤解は解いておかなきゃだよね！

そして、ワン吉に連れて行かれた先は、病院から結構離れたところにある、隠れ家的なバーだった。

……ワン吉君、絶対、何か、勘違いしてるでしょ？

私、君の彼女じゃないからね！
と、言おうかと思ったけれど、私の思い違いだったらすごく恥ずかしいので、とりあえず様子を見ることにした。

お洒落なバーの中でも、一番隔離された個室へと案内された。
こらワン吉！ワン吉の分際で私にいかがわしいことする気か？
通信教育の空手で空手９級を取得した翠先生を甘く見ないでよね！
とは思ったものの、勘違いだったらかなりの自意識過剰発言になるので、私は黙って席に着いた。

ドリンクをオーダーし、店員の姿が見えなくなった頃、ふと、ワン吉が近くに寄ってきた。
ずっとそわそわしているとは思ったけれど、やっぱり、下心があったのね、ワン吉！

「先生、」
声を潜めて、ワン吉が話しかけてきた。
なぜ、声を潜めた？
変態的な会話でもする気なのか？ワン吉？

「『パパ』って、呼びましたよ？」
「？」
一瞬、頭の中にはてなが浮かんだ。
「梓が、呼んだんです。父親の事、『パパ』って。」
「……え？本当に？」

その瞬間、私の中で、すべてが繋がった。
病院から離れたところにあるこのバーを選んだのは、病院関係者

に聞かれたくなかったから。
バーの中でも、さらに隔離された個室を予約したのも、周りの人に聞かれたくなかったから。
私に近寄ったのは、周りに聞かれないように話すため。
声を潜めたのも、周りに聞かれないようにするため。

そして、ずっと、そわそわしていたのは、私と笹岡君にしかわからない、すごく嬉しい話を聞かせてくれようとしていたからなんだ。

ワン吉は、誰にも言わないっていう私との約束を忠実に守ってくれてただけなのに、一人で焦って、バカみたいだな、私。

でも、これで、私がワン吉のことを好きと言ったかどうかが分かったわけじゃない。
どうにか、確かめなきゃ。

その決意は、
「それで、俺、思ったんです。」
ワン吉の言葉によって、
「荘太を、引き取ろうって。」
「はぁ？何言ってるの？」
彼方遠くへ吹き飛ばされた。

## 真実を告げる相手

「はぁ……。」

高層ビルの最上階にある洒落たバー。

隣には、私には勿体ないほどの素敵な彼氏の卓也さん。

「ため息なんかついてどうしたんだい？」

この、素晴らしい状況下でため息が出てしまうのにはわけがあった。

「この前、ワン吉君がね、」

「ワン吉君？あ、前に会った時に言ってたワンちゃん？」

「そうそう、そのワンちゃんがね、ＮＩＣＵにずっと入院している男の子を引き取るって言い出したの。」

卓也さんはキョトンとしている。

そうだよね、急に子供を引き取るとか、訳が分からないよね。

私はまだ、荘ちゃんと静香さんの可能性を信じたかったから、もう少し様子を見てって頼んで、その場は収まったけれど、私の中で、荘ちゃんの幸せって、何なんだろうという疑問だけが残り続けた。

「ＮＩＣＵに入院している男の子を引き取るって……。」

卓也さんはいまだに考え込んでいた。

「もしかして、ワン吉君って人間なの？」

あ！ワン吉が生物学的には人間だって言ってなかった！

ワン吉が人間だったという事実が解明してもなお、卓也さんは難しそうな顔をしていた。

「ＮＩＣＵにずっと入院してる子って荘太君の事だろ？」
あれ？ずいぶん前に、そんな話したんだっけ？
卓也さん、記憶力いいなぁ。

「翠はどう思うの？」
「私は……。」
卓也さんのあまりの剣幕に、私は言葉を詰まらせた。
私は、もう少しだけでも、静香さんと荘ちゃんの可能性に賭けてみたい。

「私は、あんまり賛成できない。」
「よかった。」
卓也さんは、ほっとした表情を見せた。

「もし、翠がそのワン吉君とやらのくだらない話に加担するようだったら、僕と翠は法廷で争わなきゃいけないところだったよ。」
……ん？
「翠にはまだ、言ってなかったっけ、僕ね、中山家の顧問弁護士なんだ。」
……んん？
そんなことは聞いてないし、法廷で争うこととか考えてないし。
まぁ、ワン吉が卓也さんと法廷で争ったら、まず、コテンパンにされちゃうだろうけど、でも、そこまで考えてなかったし。
卓也さんったら、仕事にまじめ過ぎるんだから。

でも、私は、もう少し、静香さんと荘ちゃんの可能性について話したかったな。
少し寂しくなったこの気持ちに、蓋をして、私は卓也さんに笑顔を見せた。

「それにしても、何で突然そんなことを言い出したんだろうね？」
私は、その答えを知っている。
それは、梓ちゃんが、血のつながらないお父さんの　ことを『パパ』って呼んだから。
でも、彼らの秘密をこれ以上広めてはいけない。
ワン吉君がちゃんと秘密を守ってくれているのに、私がこれ以上広めるわけにはいかない。
「うーん、何でだろうね？」
「本当は、何か、理由を知ってるんじゃない？」
冗談だったのか、本気だったのかはわからない。
でも、問い詰めるようなその言葉に、なぜか本能が警鐘を鳴らした。
この人に、真実を教えてはならないと。
その時、不意に、私の携帯が鳴った。
病院からの着信だった。
私、呼び出し当番じゃないですけど？
でも、少しだけ救われた気持ちになって、私は、卓也さんに詫びて、電話に出た。
そして、すぐに、理由を知った。
泣き叫ぶ女性の声が聞こえる中、看護師が声をひそめて私に言っ

た。

「レイプの被害者なんです。今日の産婦人科当直医が男性で、待機当番も男性で……、翠先生、来ていただけませんか？」

いかなければならない。

そして私は、卓也さんをその場に置いたまま、病院へと向かった。

## 大切なもの

「みーどーりーせーんせっ！」
私は目覚めた。
やたらとテンションの高い舞ちゃんの声で。

「あれ？舞ちゃん、おはよう！」
「おはようございまーす！」
「ん？舞ちゃんがいるってことは、ここ、病院？」
「そうですよ！病棟ですよ！」
「ていうか、私、何を……あっ！」
「先生、どうしたんですか？」
「ううん、行方不明の患者さんが……。」
「さっき、守衛さんが、防犯カメラに、昨日の夜に病院から出て行くそれらしき患者さんが映ってたから、もう、いないだろうって言いに来てましたよ。」
「そっかぁ……。」

卓也さんをお洒落なバーに置き去りにして、私は患者さんの元へと駆けつけた。

「先に、怪我の処置をさせてください。出血が多いので……。」
私にそう告げて、外科医が彼女の元へと行った。
その頃には、鎮静が効いたのか、患者の泣き叫ぶ声は聞こえなくなっていた。

「先生、私のほうの処置は終わりましたから。」
外科医にそう告げられ、私が患者の元へ向かうと、ベッドは、空になっていた。

「先生？患者さん、トイレ？」
「え？さっきまで、そこにいたんですけど？」
「じゃあ、トイレかなぁ？」

ところが、患者さんは、行方をくらましてしまっていた。

その、心の傷を、自分の心に秘めたまま。

「ところで、舞ちゃんがいるってことは、今、何時？」
「７時４５分です。」
「もう７時４５分？」
「そうですよ？」
「まだ７時４５分？」
「そうですよ！」
「舞ちゃん、今日、来るの早くない？」
「実は、今日は先生にお聞きしたいことがあって……。」

その時、病棟の電話が鳴った。
とっさに舞ちゃんが電話に出た。
舞ちゃんはさっきまでのにやけ顔はどこへ行ってしまったのかと思うほど真剣な面持ちになった。
受話器を置くと同時に舞ちゃんはこちらを振り返った。
「翠先生、中山静香さん、陣痛が始まったそうです。今からこちらに向かうとのことです。」

とうとう、この日がやってきた。

中山夫婦が病棟へやってきた。
旦那さんが、奥さんの汗を拭きながら、励ましていた。

少し遅れて、中山志乃が現れた。
中山志乃は、夫婦の様子をやや遠巻きに眺めていた。
分娩台へと妊婦が移動し始めたとき、私のＰＨＳが音を立てた。
その場にいた全員の冷ややかな視線を感じながら、鳴り続けているＰＨＳを取り出した。

ＮＩＣＵからの着信？

何で、今？

「翠先生、」
ワン吉の声が聞こえてきた。
ワン吉、空気読め、と言いたいところだが、その必死そうな様子から、どうやら緊急の用事だと悟り、周りの視線を無視して、私はそのまま通話を続けた。

「荘太が、危篤です。」

頭が、真っ白になりそうだった。
「心肺停止状態で、今、蘇生中です。」
そんなことって、そんなことって……。

「荘太は、パパ、ママって、叫んでます。」

その言葉で私は気付いた。

荘太君は今『悲鳴』をあげている。

『悲鳴』をあげながらもなお、お母さんやお父さんのことをあきらめていないんだ。

せめて、お父さんだけでも、荘ちゃんのそばに行けたら……。

私は、妊婦に寄り添う夫をまっすぐに見つめた。

「中山さん、ちょっと、いいですか？」

私が話しかけると、旦那さんは、少し顔をしかめた。

「今じゃなきゃ、ダメですか？」

今、この人には、生まれてくる子供しか見えていない。

でも……。

「今じゃなきゃ、ダメです。」

でも、忘れてはいけない命がもう一つあるでしょ？

「今から、子供が生まれてくるのに、ですか？」

今、独りぼっちで、死に直面している命を、忘れてはいけないでしょう？

「もう一人の、お子さんの事です。」

私は、思わず声を張っていた。

旦那さんは、はっと、顔をあげた。

荘ちゃん、お父さんは、ちゃんと、荘ちゃんを、思い出してくれたよ。

「あなた、翠先生の話……ちゃんと聞いてきて。私、一人で頑張れるから。」

荘ちゃん、お母さんも、ちゃんと、荘ちゃんのこと、想ってるよ。

「何をおっしゃっているのですか？」
荘ちゃん、おばあちゃんだけは空気を読めていな……。
「静香さん、貴女は一人ではないでしょう？私がついているではありませんか？」
……ん？
「私にだって、お産の経験はございます。」
荘ちゃん、荘ちゃんのおばあちゃんは相変わらずの様子だけど、
「こういうときは義母に頼りなさい。」
いつも通り、凛としているけれど、
「貴方も、何を呆けているのですか？早く翠先生の話を聞いていらっしゃい！中山家の大切な長男の話なんですよ！」
おばあちゃんも、荘ちゃんのことを想ってくれているよ。

自分の母親に喝を入れられた旦那さんは、慌てて私の元へと駆け寄ってきた。
「先生、荘太は？」
「先ほど、ＮＩＣＵから電話がありました。荘太君は今、危篤だそうです。」
それを聞くなり、旦那さんは駆け出した。
「中山さん、そっちじゃないです！」
動転しすぎて反対方向に行ってしまったけれども。

無事に、元気な男の子が生まれた。
嫁も姑も嬉しそうな様子ではいるが、どことなく落ち着かない様子だった。
気持ちは分からなくもない。
旦那さんは、ＮＩＣＵに行ったきり、戻ってこないし。
ＮＩＣＵからの、連絡もないし……。
「あの、」
静香さんが話しかけてきたと同時に、私のＰＨＳが鳴った。

ＮＩＣＵからの着信だ。
自分の心臓の音が聞こえそうだった。
どちらかだと思った。
荘ちゃんが助かったのか、ダメだったのか。
助かっていてほしい。
でも、私はワン吉君から聞いたことがある。
『悲鳴』をあげている状態から、助かった赤ちゃんを、一度も、見たことがないと。
電話を取った。
「先生、」
ワン吉の声が明るい。
「荘太が、意識を取り戻しました。」
よかった。
本当に、よかった。
「静香さん、」
「静香！おふくろ！」
私が話しかけた言葉は、猛ダッシュで、戻ってきた旦那さんの声にかき消された。
「荘太が！目を開けたぞ！意識が戻ったんだ！」
嫁と姑が笑顔で顔を見合わせた。
荘ちゃん、荘ちゃんの家族は、ちゃんと、荘ちゃんのこと、想ってるよ。

よかったね、荘ちゃん。

この時、一人だけすごくしょんぼりな人がいたことを、私はすっかり忘れていた。

仕事にキリがつくと同時に、私は立ち上がった。
荘ちゃんの様子をこの目で見て、静香さんたちに伝えなきゃ！
「あ、翠先生！」
「舞ちゃん、あとで聞くね！」
とにかく、荘ちゃんの様子が気になって仕方がなかった私は、まっしぐらにＮＩＣＵを目指した。
荘ちゃんは、すでに人工呼吸器が外れていて、自分でしっかり呼吸している姿を見て、私は、ほっと胸をなでおろした。

……数時間前まで心肺停止状態だったとは思えないほどに回復してる。

振り返ると、そこにワン吉がいた。
「荘ちゃん、すごい回復力だね。」
「本当に、すごいやつですよ。」
ワン吉君は、穏やかに笑った。
「今日、飲みに行こうよ。」
ワン吉は、黙ってしっかり頷いた。

いつもの居酒屋のカウンター席に、ワン吉君と二人で腰かけた。
「荘ちゃん、元気になって、よかったね！」
「はい。」
ワン吉君が、少し嬉しそうにほほ笑んだ。

「あの時、」
ワン吉君が話し始めた。
「先生に電話したあの時、荘太は『悲鳴』をあげていたんです。」
……やっぱり、そうだったんだ。
「その時、あいつが叫んだ名前は『パパ』と『ママ』……。」
ワン吉君は、ジョッキに残ったビールを飲み干した。

「それだけでした。」
「……じゃあ、」
「あいつは、決して、父親の事も、母親のことも、諦めていないんですよ。」
ワン吉君は、まっすぐ前を見つめている。
「あいつが本能で、心の底から大切に想っているのは、父親と、母親だけなんです。」
まだ、荘ちゃんがお父さんのこともお母さんのことも諦めていない。
それは、とてもうれしいことのはずなのに、ワン吉君の横顔は、どこか物悲しかった。

「俺の名前は、呼ばれませんでした。」

悔しそうに吐いたその言葉に、哀しそうな横顔に、私はこの時初めて、笹岡君がどれほどの覚悟で荘ちゃんを引き取るといったのかを痛感した。

それは、同情なんかじゃなかったんだ。
ＮＩＣＵに配属されてから、笹岡君は、ずっと、荘ちゃんと友情を育んでいたんだ。
だから、荘ちゃんが、ずっと独りぼっちで寂しい想いをしているのが我慢できなかったんだ。

でも、荘ちゃんは、荘ちゃんの本能はずっと、お父さんと母さんを求め続けていた。
荘ちゃんの心の奥底で求め続ける人物の中に、笹岡君は、いなかった。
それは、どれほど寂しいことだろうか？

私は、押し黙ったまま、何も言えなかった。

「でも、」
ワン吉君は私のほうに振り返った。
「俺は、荘太にこれ以上寂しい想いをしてほしくないから、」
寂しいけれども、暖かなその瞳が、いつか見た、梓ちゃんのパパのそれと重なった。

「最後に一つだけ、賭けをしてみようと思うんです。」
「……賭け？」
ワン吉君は、頷いた。

「荘太に、母親のこと、「ママ」って、言ってもらおうと思っているんです。」

「どういうこと？」
「たぶん、荘太はもう、言葉の話し方に気付いているんです。」
「それが、どう、賭け、なの？」
「母親が、喜んだら、何か反応を示したら、きっと、荘太はあの家に帰っても大丈夫だって信じて、俺は荘太の事はキッパリ諦めます。」
私は、頷いた。
「でも、」
ワン吉君は、少し険しい表情になった。
「もし母親が、拒絶したり、無反応だったりしたら……」
少しの間、沈黙が流れた。
私は、次の言葉を待った。
「俺は、どんな手を使ってでも、荘太を引き取ります。」
「え？」
荘ちゃんの想いは無視なの？
ていうか、ワン吉君、法廷で卓也さんと争ったら、絶対、負けるから！
「そこしか、チャンスはないんです。」
「……チャンス？」
「あいつらは、自分の意志で言葉を発したときに……。」
「あっ！」
赤ちゃんは、言葉を発したその時に、『声』を失う。
そして同時に、『声』を発していた時の記憶を失う。
「もし、母親が荘太を愛してくれないのなら、」

私が理解したのを察したのか、ワン吉君は、続きを放し始めた。
「いっそ、母親を待ち焦がれた記憶も、寂しかった記憶も全部忘れて、」
ワン吉は、荘ちゃんの想いを無視したかったわけじゃないんだ。
「俺と、ゼロから始めればいいと、思うんです。」
ワン吉は、荘ちゃんの想いを知っているからこそ、そこに賭けようとしたんだ。
母親と荘ちゃんの可能性を。
そして、荘ちゃんが寂しい想いをしない可能性を。

## 最低

「みーどーりーせーんせっ！」
仕事が終わるなり、私は、テンションの高い舞ちゃんに襲われた。
「ちょ、とうしたの、舞ちゃん？」
「実は先生にお見せしたいものがありまして……。」
そう言いながらも満面の笑みの舞ちゃんは、一枚の写真を取り出した。

写真に写っている店の雰囲気に見覚えがあった。
真ん中に後ろ姿だけ写っているのは紛れもなく私だ。
そして、その隣に私のほうを向いている男性は……。

「……えっ？これ、いつの間に？」
「先週です！」
それで舞ちゃん、先週からやたらテンションが高かったのね。

「で、先生、このインテリ系イケメンとはどういったご関係で？」
私の隣に写っていたのは卓也さんだった。

あんなに一生懸命隠していたのに、あっさりバレちゃうもんなんだなぁ。
「舞ちゃんの、想像通りでいいんじゃないかな？」
呆然としながらも、そう答えたとき、
「翠先生、お疲れ様です。」
何とも言えないタイミングで、ワン吉が現れた。

「まあ、笹岡君、こんなところにのこのこと現れて。」
相変わらず舞ちゃんは、イケメンでない人には全く容赦がない。

苦笑いしつつも、私はなにか大切なことを忘れているような気がした。
「君は全くお呼びでないのよ！」
「……お呼びでない？」
何だろう、私の本能が、ワン吉に知られちゃいけないって警鐘を鳴らしている。
何でだろう？

舞ちゃんがワン吉に手招きした。

「ちょ、待って、舞ちゃん！」
「いいじゃないですか、減るもんじゃなし！」
舞ちゃんに知れたら病院中に知れ渡ることくらいは予想がついていた。
でも、待って！
私、何か、大事なことを忘れてる！

「ここに写ってるのは、間違いなく翠先生でしょ？」
舞ちゃんに言われて、ワン吉がうなずいた。
私、何か大変なことを忘れてる気がする！
だから、待って！
まだ、言わないで！

「でね、その隣に写ってるインテリ系イケメンがね……。」

……あっ！思い出した。
「舞ちゃん！」
「先生の彼氏なの。」

……ああっ！

私は、公園で笹岡君に告白の返事を聞かれたあのとき、私も好きかもと言ってしまっていた。

それをやっと思い出したのに、弁解する余地のないまま、私に彼氏がいるという事実が、最悪の形でワン吉に知れることとなった。

舞ちゃんがふと時計を見た。

「あ、もうこんな時間だ！じゃ、先生、私、用事があるんで、今度じっくり話聞かせてくださいね！」

そして、無情にも舞ちゃんは去って行ってしまった。

私とワン吉だけを残して。

「先生、彼氏、いたんですね。」

「あのね、笹岡君……！」

「俺、勝手に一人で好きになって、告白して、両思いになった気になって……とんだ、大馬鹿者ですね。」

そういうと、笹岡君は私に背を向けた。

違う。

本当の大馬鹿者は、私だ。

一生懸命な笹岡君の告白に、寝ぼけながら、トンチンカンな受け答えをして、誤解を招いたのは、私だ。

でも、弁解のしようがないよ。

この口が、笹岡君に向かって、好きと言ってしまったのは、事実なんだから。

「あ、そうだ、先生、」
少し歩いたところで、笹岡君が振り返った。
その表情は、どことなく寂しげだ。

「荘太、ちゃんと、「ママ」って呼びましたよ。」
少し離れた距離感のまま、笹岡君は話し続けた。

「母親は、涙を流して、喜んでました。」
静香さんが、ちゃんと、荘ちゃんを大好きでいてくれた。
それは、すごく嬉しいことなのに、何故かその事実は私の心に寂しく響いた。

だって、笹岡君は……？
荘ちゃんを、引き取るって言い出すほどに、荘ちゃんを大切に想った笹岡君の気持ちは……？

「俺は、いつだって、一人で空回りしていただけなんです。」
空回りじゃない！
笹岡君が荘ちゃんを、赤ちゃんたちを大切に想うその気持ちは、誰かの心に、私の心には確実に、響いているんだよ！
そう言いたかったのに、

「最初から、俺なんか、必要なかったんですよ。」
そんなことない！
笹岡君が支えたから、赤ちゃんたちも、私も、頑張ってこられたんだよ！
笹岡君が、いてくれたから、私は、荘ちゃんたちのことも希望を捨てずにいられたんだよ！

そう、言いたかったのに……。

声が出なかった。

声を出したらその瞬間、涙が出てしまいそうだったから。

何で、私は、泣きそうになっているんだろう？

何で、私は、こんなに苦しいんだろう？

「じゃあ、先生、」

黙ったままの私に、笹岡君が、話しかけてきた。

「イケメンの彼氏さんとオシアワセに……。」

笹岡君はほほ笑んだつもりだったのだろうけど、それは、いつもの笑顔とは違って、ぎこちなかった。

そして、今度は振り返ることなく、笹岡君は、歩いて行った。

遠ざかるその後ろ姿を見ながら、私はその場に座り込んだ。

私は最低だ。

荘ちゃんは、言葉を発して、退院した。

荘ちゃんは、ＮＩＣＵのことも、笹岡君のことも全部忘れて、行ってしまった。

引き取ろうとまで思うほど、大事に思ってきた荘ちゃんに忘れられ、そのうえ離れ離れになってしまった笹岡君。

そこに、さらに私は追い打ちをかけた。

私は、一人の女としてだけじゃなく、一人の人間としても、最低だ。

## 最低（後書き）

「こんにちは赤ちゃん」では、最終回に相当する時期に到達しました。

でも、まだ、続きます。

## 罰

私に彼氏がいることが発覚したあの日以来、私は滅多にＮＩＣＵに近寄らなくなった。
笹岡君を見かけることだってもちろんあったけど、お互いなるべく目を合わせないようにしていた。

今まで、仲よくしてきた人と、こんな風に、目もあわさなくなるなんて……。
でも、私は最低な仕打ちをしたから、もう、笹岡君に関わっちゃいけない。
そう心に決めた。

これは、笹岡君に最低な仕打ちをした私への、罰なんだ。

ある日の事だった。
救急外来に妊婦が運び込まれた。
すぐに診察した。
でも、お腹の子の心臓は、もう、動いていなかった。

ねえ、笹岡君、君には、赤ちゃんの『声』、聞こえてた？
ねえ、笹岡君、君には、赤ちゃんの『想い』、届いてた？

妊婦は泣きじゃくっていた。
早く気付けなくてごめんねと。
お母さんがいけないの、と。

ねえ、笹岡君、君には、赤ちゃんの『悲鳴』、聞こえてた？
ねえ、笹岡君、君には、赤ちゃんが、最期に何て言ってたか、聞こえてた？

笹岡君と会話をすることがなくなって、私は『声』の話を聞くことがなくなったけれど、私はそれでも、一度も、その存在を知らずにいればと、笹岡君に出会わなければと後悔したことはない。

その存在を知っていたから、赤ちゃんたちにも伝えたい『想い』が、ちゃんとあるって知れたから。

私は泣きじゃくる彼女に歩み寄った。
私は、『声』の存在を知っているから言えるんだ。
赤ちゃんは、最期まで、ちゃんと、お母さんのこと、大好きでしたよって。

気休めじゃない、それは、真実。

でも、『声』の存在を感じるたびに、赤ちゃんの『想い』を考えるたびに、心が痛むのは、それを教えてくれた笹岡君に、私はひどい仕打ちをしてしまったから。

この痛みは、罰だ。

愚かな私への、罰なんだ。

## 決意

今日は外来の日だ。
午前の外来の最後の患者を招き入れようと私はカルテを見た。
次は、初診の人か……。
「次の人、どうぞ。」
いつものようにそう呼び入れると、元気な返事とともに、若い女性が入ってきた。
そのお腹には、わずかに膨らみがある。
「確認のためにお名前を教えてください。」
「河合慶子（かわいよしこ）です。」
可愛らしい笑顔が印象的な女性だ。
ここ最近、月経が来ないと言ってやってきた、河合さん。
それもそのはず、彼女は妊娠をしていた。
しかも、妊娠7か月。
……なぜ、ここまで気付かなかったんだろう？
「最近、仕事ばっかりしてたから、自分の体調の変化に気付かなかったのかもしれないです。」
まあ、確かに、仕事にのめりこんじゃうと、他のこと、どうでもよくなることってあるよね。
私も、仕事にのめりこめば、他のことはどうでもよくなるんじゃないだろうか？
そんなことを考えながら、私の午前の診察は終わった。

「翠先生！お久しぶりです！」
お昼休みに入った私は、不意に呼び止められた。
「あ！湯川さん！お久しぶりです！」
そこには、崇君のお母さんがいた。
「今日は、どうされたんですか？」

「循環器内科の、定期健診です。」
「あれ？翠先生！こんにちは！」
「あら、平山さん！こんにちは！」
湯川さんと話しているところに、今度は、さやかちゃんのお母さんまでやってきた。
「平山さんは、今日はどうされたんですか？」
「さやかが体調崩しちゃって、また、入院なんです。」
私の前に並ぶ二人は、きっと、それぞれの子供である崇君と、さやかちゃんが、実は両思いだったという事実を知らないだろう。

「じゃあ、私は失礼します！」
簡単に挨拶をした後、平山さんは去って行った。
「あ！」
突然、湯川さんが大きな声を出したので、私はびっくりして振り返った。
「あの人、見覚えがあると思ったら、崇の隣のベッドのさやかちゃんの！」
「そうですそうです！」
あえて、崇君とさやかちゃんの関係は言わないでおこう。
湯川さんは、自分から、崇君の話ができるくらいに、崇君の死を乗り越えたのかもしれない。
でも、少しだけ、湯川さんの表情は寂しげだった。
きっと、湯川さんは、崇君の存在を忘れることでその悲しみを乗り越えたんじゃないと思った。
崇君との思い出も、失った悲しみも、すべて受け止めて、それでもなお、前を向いて生きているんだと思った。
私に手を振って去っていく彼女を見送りながら、私も、乗り越えなければと思った。

今日の午後の診察は、産後検診だった。

今日も、何か月かぶりの顔ぶれがそろっていた。
そして、残すところ、あと二人となった。

「次の人、どうぞ。」
患者に続いて、赤ちゃんを抱っこしたお父さんが現れた。
相変わらず川嶋さんの旦那さんは子煩悩だ。
「川嶋さん、調子はどうですか？」
「元気です！梓も元気です！でも、いつものオムツじゃないのを使うと、たまにちょっとオムツかぶれが……。」
お父さん、梓ちゃんの診察は、小児科ですよ。
お父さんに抱っこされた、梓ちゃんは、幸せそうで、それが私のエゴじゃないと分かるのは、笹岡君が、教えてくれたからなんだと思った。
梓ちゃんは、お父さんのことをパパって呼びたいって、お父さんの抱っこが大好きだって『言って』たもんね。
そして、幸せそうに部屋を出て行った3人を見て確信した。
笹岡君は、私に最低の形でフラれても、あの秘密を漏らすようなまねはしなかったんだと。

「次の人、どうぞ。」
赤ちゃんを連れた女性と、赤ちゃんのお兄ちゃんを連れた、姑が入ってきた。
それは、静香さんと、その姑、そして亮ちゃんと、荘ちゃんだった。
幸せそうな家族を見て、胸がずきりと痛んだのは、その裏で涙をのんだ笹岡君がいたから。
そして、私はその笹岡君に、さらなる追い打ちをかけたんだ。
今日の診察が終わって、私は考え込んでしまっていた。
懐かしい顔ぶれに会った。

その顔触れは皆、懐かしいのに、その懐かしい思い出は、私の心をえぐった。
懐かしい思い出には、全部笹岡君が関わっていて、赤ちゃんの『声』を聞くことができて、誰よりも優しくて、だれよりも、赤ちゃんの気持ちを考えていた笹岡君を、私は最低な形で傷つけたんだという事実が、私の心をえぐり続けた。

不意に、ＰＨＳが鳴った。
「先生、今日の午前の患者さんなんですけど、カルテの記載が……。」
問い合わせの電話だった。
午前の最後の患者さん。河合さんだ。

ふと、彼女とのやり取りを思い出した。
仕事に打ち込んでいたために、妊娠にすら気づかなかった彼女。
私も、一生懸命に仕事をしたら、このつらい気持ちを何度も思い出さないんじゃないだろうか？
私は、女としても、人間としても最低だけれど、せめて、医者としてだけは、最高の仕事ができるようにしよう。

私は決意を新たに立ち上がった。

あ、いけない、入力ミスがあったんだった！

## 事件

あの日、決意を新たにしてから人としては最低でも、せめて医者としてだけは、最高の仕事ができるようにと、私はより一層、仕事に励んでいた。

それでも、妊婦さんと接するたび、赤ちゃんと接するたび、その『声』を思い浮かべるたびに、胸が軋んだ。

そして、私の脳裏から、最後に笹岡君が見せた、ぎこちない笑顔は消えないままだった。

これは、愚かな私への罰なんだ、そう自分に言い聞かせながら、毎日を過ごしていた。

そんなある日の事だった。

産婦人科病棟でいつものように仕事をしていた私の視界の端に、笹岡君の姿が見えたような気がした。

私、とうとう笹岡君の幻影を見てしまうほどに心を病んでしまったのね。

そう思いながらぼんやり笹岡君の幻影を見ていると、幻影と目が合った。

ん？目が合った？

幻影なのに？

やばい、私、近いうちに死んじゃう？

って、これは笹岡君のドッペルゲンガーだから私には関係ないじゃん！

うろ覚えのドッペルゲンガー伝説までもが私の思考を侵食しているうちに、ワン吉のドッペルゲンガーがこちらに近づいてきているのを感じた。

本物でも偽物でも、とにかく逃げなきゃ！

ところが、立ち上がろうとした私は不意に腕を掴まれて、再び椅子に座り直す形になった。

え？ちょっと待って？

これは、本物の、ワン吉？

いや、ええ、そんなことだろうとは思っていたけれど、でも……。

なんで、ここに来たの？

どうして、私の腕を掴んでいるの？

私は、ワン吉を、最低な形で振った女だよ？

「翠先生、」

ワン吉が、声を潜めて話しかけてきて、私は思わずワン吉を見た。

その、真剣な表情は、私の頭の中に残り続けていたあの時の、ひきつった笑顔の印象を見事に払拭した。

「な、何？」

ワン吉につられて思わず声を潜めた。

「ここって今、命が危ない状態の妊婦さんって、いますか？」

「え？そんな危ない人は、いなかったと思うけど……。」

ナースステーションで心電図などをモニターしている患者さんもいるにはいたが、モニターのアラーム音は聞こえてこなかった。

「でも、何で？」

「今、ものすごい『声』が聞こえているんです。」

ワン吉の真剣な様子から、状況はかなり緊迫していそうだと思った。

「どんな、『声』？」

「『ママ、死なないで！』って、ＮＩＣＵに聞こえるくらい大きな声で叫んでるんです。」
それが、本当ならば、今まさに、一人の妊婦の命が危ないかもしれないということだ。
病棟の患者さんを一人一人まわっていたら、手遅れになってしまうかもしれない。

「どこら辺か、わかる？」
「近づけば、『声』が大きくなるので、わかると思います。」

笹岡君が私を案内した先はシャワールームだった。
ワン吉、まさか、堂々とのぞきがしたかったわけ……じゃあないよね、さすがに。
私はほんの一瞬ワン吉を疑ったけれど、ワン吉の真剣な表情にその疑いは一瞬にして消え去った。

シャワールームの予約表を見ると、今の時間帯は河合さんが入っているようだった。
彼女は切迫早産しそうになり、病棟で管理入院中だった。
妊娠７か月まで、妊娠にすら気づかなかった、鈍い彼女の事だから、自分の体調不良に気付かなかったのかもしれない！
何かあったら、どうしよう？

「河合さーん？いますか？」
私は大きな声で呼んでみたが中から返事はなかった。
「おーい、河合さーん！いるなら返事して！」
……やはり、返事はない。
耳をすましたけれども、中からはシャワーの音しか聞こえなかっ

た。
「先生、中で赤ちゃんが、『ママを助けて！』って、叫んでます！」
ワン吉の様子は真剣だった。
「開けますよ！」
私は、外からカギをこじ開けて、中を見た。

湯気に視界を遮られながらでもわかる。

床一面に広がる……血の海。

私はなりふり構わずシャワールームに入っていき、迷うことなく緊急呼び出しボタンを押した。

ナースたちの足音がこちらに近づいている中、私はどこから出血しているのだろうかと彼女の体を見た。

……出血は、手首から？
それじゃあまるで、自殺みたいじゃない？

その時私は、初めて彼女の肩の傷に気付いた。
この傷に、見覚えがある。

ある事件の被害者が、同じ場所に、同じような傷を負っていたのを見たことがあった。

それは、荘ちゃんの弟の亮太君が生まれる前夜の事だった。
当直でも、呼び出し当番でもなくて、デート中だったにもかかわらず、私は病院に呼び出された。
当直医も、呼び出し当番医も、男性だったから。
患者は憎むべき犯罪の被害者だった。
彼女は、レイプの被害者だった。

救急外来に私が到着した時、患者は泣き叫んでいた。
遠巻きに、その肩から血が流れ出ているのが見えた。

外科医がけがの治療をした後、その患者さんは行方をくらました。
病院中をくまなく探したが、どこにもいなかった。
結局、身元もわからないまま姿を消した彼女が、私の目の前に再び現れていたなんて……。

でも、よくよく考えてみれば、彼女が私のところに来たのは、妊娠7か月のころ。
そして、そのあと、静香さんに抱っこされてきた亮太君も、生後7か月だった。
河合さんがあの時の彼女でもおかしくはないというのに、私は気付けなかった。

河合さん自身も、いつも嬉しそうに笑っていたし、彼女のお見舞いに来る友人や家族も、心配そうなそぶりを見せていなかった。
でも、それは、河合さんが、真実を隠していたからだったんだ。
恐ろしい犯罪の被害者になった事実を隠して、皆に笑顔を見せながら、河合さんは、心の中で泣いていたのかもしれない。

その笑顔の裏では、崩壊寸前の心が、悲鳴を上げていたのかもしれない。
気付くチャンスはいっぱいあったはずなのに、それを見逃した、自分自身の鈍さを呪った。

でも、今は、後悔すべき時じゃない。
後悔は、あとで悔やむから、後悔なんだ。
その前に、やるべきことが山ほどある。
河合さんは、意識はもうろうとしているけれど、まだ呼吸がある。

河合さんを、この、笑顔が可愛らしい女性を、死なせるわけにはいかない。
河合さんに宿る赤ちゃんも、ママを助けてと懸命に叫んだお母さん思いのあの子も、死なせるわけにはいかない！

二人とも、絶対に助けてみせる！

## ただ一人

「翠先生、膨れたってダメですよ！」
河合さんは、処置室に運ばれたけれども、私は病棟に取り残されたままだった。
ナースや、他の産婦人科医が駆けつけた頃には私は既に血まみれで、その格好で院内を徘徊するなと、その場にいた全員に止められてしまったのだ。
確かに、そうだけど……。
服まで血まみれになった私は、患者さんが着る病衣を着させられていた。
ナースステーションの一角で、私は目の前に置いたＰＨＳを恨めしげに見つめた。
容体が落ち着いたら連絡するからそれまで来るなって……。
「気になって仕方ないよー！」
「はいはい、先生、わかったから、とりあえず、紛らわしいんで白衣着てくださいね。」
何だか、すごく軽くあしらわれた！
「でも、でも……！」
「紛らわしいから早く着る！」
「……はい。」
これ以上看護師さんの機嫌を損ねてはいけないので、私は大人しく白衣を羽織った。
ちょうどその時、私のＰＨＳが鳴った。

私は病棟から駆け出した。
「先生！」
あ、ワン吉だ！
って、ワン吉め、呑気にサボりか？

そ、思いつつ時計を見た。
１８時。
あ、仕事、終わってたのね。

「先生、あの人は……？」
「今、とりあえず容体が落ち着いたみたいだから、様子を見に行こうと思って……。」
「俺も、行きます。」

外来患者が帰り、静まり返っているはずの院内に、女性の叫び声がこだましていた。
少し、近づいて、それが、河合さんだと分かった。
容体が落ち着いたというのは、患者の鎮静が効いたという意味ではなく、生命の危機的状況を脱したという意味だけで、使われたようだと、その時確信した。
叫んでいることしかわからなかった叫び声が、どんな内容か分かった瞬間、私の足は止まってしまった。

「何で死なせてくれないの？何で死なせてくれなかったの？」
いつも笑顔で明るく振る舞っていた河合さんの言葉だとは思えなかった。
彼女の言葉だと、思いたくなかった。
「生きてたくないの！死にたいの！死にたいの！ねえ、死なせてよ！私は生きても意味がないの！私は、汚れてるの！」
崩壊寸前のギリギリのところで何とか均衡を保っていた心は、壊れてしまったんだと感じた。

彼女の命は助かったのに、彼女の心は壊れてしまった。
その心の傷に気付けなかった私に、何ができるのだろう？
私は、ふと、助けを求めるように笹岡君を振り返った。

私より、少し後ろで立ち止まっていた笹岡君もまた、悲痛な面持ちで私のほうを見ていた。
私と目が合うと、笹岡君はこちらに歩み寄ってきた。

「先生、」
悲痛な面持ちのまま、ワン吉は私に話しかけてきた。
「お腹の子も『叫んで』ます。」
そうか、ワン吉には今、お母さんの叫び声だけでなく、お腹の中の赤ちゃんの叫び『声』まで聞こえているんだ。
それは、どれほどつらいことだろうか？
それは、どれほど苦しいことだろうか？

「『ママ、僕は生きたいよ！』」
「死にたい」と叫ぶ母親のお腹の中で、赤ちゃんは『生きたい』と叫んでいた。
「『ママにも、生きてほしいよ！』」
「死にたい」と叫ぶ母親のお腹の中で、赤ちゃんは、『生きてほしい』と叫んでいた。
「『ねえ、ママ、聞いて、ママ！』」
赤ちゃんの叫び『声』は、お母さんにはまるで届いていないようで、彼女の叫び声は今も廊下に響き渡っていた。
「『僕は、ママと生きたいんだ！』」
お腹の中に宿る赤ちゃんの、ただ一つの願い。
「『ママと一緒じゃなきゃイヤなんだ！』」
ただ一人、一緒に生きたい相手にその『言葉』は届かない。
「『ねえ、ママ！お願い、聞いて！』」
それならば……。
「『ねえ、ママ、ママ……！』」
私は駆け出した。

私は脇目も振らずに妊婦の元へと駆け寄った。
「いい加減にしなさい！」
そして、彼女の頬を思いっきりはたいた。
一瞬にして、辺りが静まり返った。
でも、それくらいのことで動じる私ではなかった。
それに、湧き上がった感情がそれくらいの事では抑えられなかった。
私は、頬を押さえながら呆然としている妊婦の胸ぐらをつかんで、その目を見つめた。
「あなたは、自分のことしか考えてない！」
怒りとか、悲しみとか、色々な感情が入り混じって、私の手は少し震えていた。
「確かに、あなたの体験は、死にたいともう程につらいものだったと思うわ。」
もちろん、その犯罪は、許されるべきものではない。
「でも、今、あなたが命を絶つことで、あなたは一つの命を殺すことになるのよ！」
彼女は、はっと気づいたようにお腹に手を当てた。
私は妊婦の胸ぐらから手を放し、彼女の肩を掴んだ。
「お腹の子は、あなたを選んだのよ！他の誰でもない、あなたを選んだのよ！あなたと一緒に、生きたいと願っているのよ！」
流れる涙をそのままに、私は妊婦に叫ぶように言った。
「あなたは、お腹の子供の願いを、無視するの？」
私の脳裏に、さっき笹岡君が教えてくれた『声』が蘇っていた。
『僕は、ママと生きたいんだ！ママと一緒じゃなきゃイヤなんだ！』

それを知った私には、それを伝える義務がある。
私は、彼女のお腹にそっと手を当てた。
「お願いだから、生きて。」
お願いだから、気付いて。
「生きてください、お腹の子と一緒に。」
お願いだから、わかって。
あなたと一緒に生きたいと願う命がいるということ。

私の言葉に反応するようにお腹の中の赤ちゃんが動いたのを感じた。
その瞬間、妊婦の目から涙が溢れだした。

「ごめんね……。」
涙を流しながら妊婦はお腹をさすり始めた。
「ごめんね、自分のことしか考えていなくて。」
赤ちゃんがお腹を軽く蹴ったような感じがした。

お母さんがお腹をふれているのを確かめているような優しいその感触に、赤ちゃんの想いがこもっているような気がした。

『ママ、一緒に頑張ろう。』

河合さんが病棟に搬送されるまで見送った私は、病院の中庭にいた。
「笹岡君、教えてくれてありがとね！」
私の後を引き継いで処置した医者から、もう少し発見が遅かったら、手遅れになっていたと知らされた。

ワン吉が、あの時、機転を利かせてくれなかったら、河合さんも、お腹の子も助からなかったそうだ。

ワン吉は照れたように頭をかいた。

「すごく、必死な『声』だったから、どうしても伝えなきゃいけないと思ったんです。」

そして、こちらをちらりと見て言った。

「まさか、妊婦にビンタをするとは思いませんでしたけどね。」

「ちょ、ワ……！」

あ、危ない、ワン吉って言いそうになった。

「それより、先生、その格好じゃ寒くないですか？」

私が、寒いと答える前に、私の肩にジャケットがかぶさってきた。

「あ、ありがとう。」

ワン吉君は、最低な仕打ちをした女に、何でこんなに優しくできるんだろう？

私は、ワン吉を、最低な形で、どん底に突き落とした女なんだよ？

「ねえ、何で、私に伝えたの？」

私は、思ったことを心の中だけに留めていられない。

「こんな、最低なことをした女、話しかけたくもなかったんじゃないの？」

だって、わからない。

あの時、産科病棟には、ナースだって、他の産婦人科医だって、いたはずなのに、何で、私だったの？

「翠先生しかいなかったんです。」

ワン吉が、まっすぐ私を見つめた。

「『声』のこと、信じて聞いてくれるのは、翠先生、ただ一人なんです。」

私は、『声』を利用していただけのようなものなのに、ワン吉に

とっては、それは、奇跡のようなことだったんだ。
「先生に出会う前の俺だったら、聞こえなかったことにしていたかもしれないんです。」
ワン吉は、少し俯いた。
「でも俺は、」
ワン吉は、再び顔をあげて私を見た。
「俺は、翠先生に、『声』の存在を信じてくれる人に出会ってしまったから。だから、伝えずにはいられなかったんです。」
ワン吉はまっすぐに私を見つめ続けていた。
「翠先生、」
黙ったままの私に、ワン吉が話しかけてきて、私は思わず顔をあげた。
「俺には、翠先生の存在が、必要です。」
また、告白なの？
「俺には、『声』のことを、信じて聞いてくれる存在が、必要なんです。」
そうだよね、あんな最低な仕打ちをされて、もう、一人の女として、好きでいるはずないよね。
「もう、絶対、恋人になってくださいとか言いませんから。」
お互いに絶対に恋愛対象にはならないという条件のもと、
「また、あいつらの『声』の話、聞いてもらえませんか？」
私とワン吉の『声』の繋がりは、半年以上の時を経て、復活することになった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6277r/

---

翠先生のワン吉くん～こんにちは赤ちゃん1.5？～

2011年10月7日12時44分発行